



親繪鳥聖人御一代記圖繪

五





親鸞聖人御一代記圖繪卷之五

御門侶省傳

○大夫房覺明之傳

木曾冠者源義仲の從臣。大夫房覺明の倍姓。清和天皇第四の皇子。滋野親王  
 より九代。後胤海野小太郎幸親信濃守の子より。始めの禁庭。仕へて勸學院  
 の文章博士と号す。進士。藏人。通廣と号せしが。出家して西乘房信故と号し。  
 南都興福寺の学侶とす。治承四年。茂仁親王の令旨を奉る。平家追討  
 の返翰と書く。清盛の平家の塵芥。武家の糟糠と云句なり。清盛後。是を聞て  
 大に憤り。信故を殺さんと欲す。信故これを遁きて。信濃國の下里。木曾義仲  
 と仕へ大夫房覺明と号す。越中砥並山に於て。義仲の願書と書きて。八幡宮に



見録書一代記圖繪卷之五



壽永三年五月木曾冠  
者義仲平家追討の為

みとく加賀越中の境あり  
砥並山に討出られし時此  
峯の八幡宮へ願書と奉

られる其願書と大夫  
房覚明兼らるる書

語を見へる  
文武両道の達者

名高



大夫房覚明



義仲の願書

と書と



納む博學廣才よくもあつても能書の聞へ高く義仲喪後信州に隠して  
 箱根の山中に住じ建久六年叡山に登り慈鎮和尚の法席に列り名を淨寛と  
 改む此時祖師聖人の範宴少納言の公と号し未だ御幼推知つて人の聰  
 明博識よく一聞千悟の器芝蘭の白ひ一山小蕙は是も依り和尚の寵愛衆小  
 超人の如く敬び給ふ淨寛も此君の決し佛菩薩の化現し渡らせり公  
 と常々敬ひ尊び給ふ此頃尊々靈夢を二度も感得り一度は範宴の公  
 佛身も現しりみる今一度は觀自在菩薩現しり拜礼しり勿忘  
 範宴の公と化しり見と夢覚ぬ程淨寛尊重せり日來も増  
 進し上時祖師聖人二十九歳し法然上人の禅室に至り念佛の真門に  
 入りし時淨寛も潜し同伴し俱に空師の會下し連りし御弟子とあり

空師より法名を西佛と賜り然るも西佛は原来聖人の帰依し信仰濃  
 因の故より吉水の門下小伴を給ふれ法然上人も是と知らせり  
 西佛として聖人上足の弟子とありひり西佛房の聖人より年齢十六  
 歳長し祖師聖人越後國に配流のとき供奉しなせり北陸  
 關東に隨身して給仕し奉りぬ聖人御帰洛しるの時其始終毎小  
 陪從せり又曆元年聖人宣く你年齢を以高しり北陸關東經廻の間  
 隨身して我化益を助けり滅満足せり自今日本國に歸り専修念佛を弘通  
 せり是正し我に常隨りし百倍の本望の如し聞へせり西佛の聖人小  
 別を奉つんと身と割く悲しき師命の重きを背きけり謹んで領  
 掌しり本國信濃に下り始め海野庄白鳥に一字を閑き壯人の真



宗と弘め後又塩寄し以ふ地の一寺と建立し是と康樂寺と稱し西佛八十

五歳仁治二年辛丑正月廿八日入寂す

一説小西佛嘗て祖師聖人の御行状と祀し法橋淨賀西佛房の授く仁治

二年西仙房没後淨賀此御行状祀を以て。覚如上人又呈し繪面を加人事

と續ふ上人淨賀と俱小關東北陸の御旧蹟を巡行せられ而して永仁三

年繪傳成就と則繪傳四軸の画に法橋淨賀傳二卷に覚如上人の御筆とを

○佐々木兄弟護心之條

佐々木三郎盛綱ハ人王五十九代宇多天皇の後胤近江の源氏佐々木源三秀義

の三男なり勇猛強勢なり萬夫不當の武士なり元暦文治の年間武將源

頼朝卿の幕下ハ屬し舍弟四郎高綱と俱小本曾を追討して平家と亡し武

名海内ハ響たり就中高綱ハ宇治の早瀬の先陣其名を轟かし盛綱ハ西海

藤戸の波上と先騎して英名と源平兩陣の中ハ輝し終ハ源氏一統の世と

す後盛綱今ハや衰老の身とあり去來の事と思ふに實ハ盛人なり

平家二十餘年の栄花ハ只一睡の夢とあり今又源氏世ハ夢と榮と極

むといふも飛鳥川の淵瀬定りたり頼朝を予ハ壯人なり時の鬼神も欺

さ大山も劈くべき勢ハ有しも衰老の今ハ至りての眼と鏡よりわし力成

杖ハ外の外ハ出息ハ息と待びて命終りの世の風ハ今も命終り也

地獄ハ墮せんと必然なり嗚呼の悲後ハ世の苦ミを免んやと昼夜是

と悲と歎き有りて善知識のわづ聞法の施を蒙り迷ハの夢を覺るべし

思ひ續け有りて盛綱宿善の時々に至りたりや親鸞聖人越後小



しわく。弥陀の本願を弘通し、事と聞及び直に彼國へ趣き、聖人の渴し奉り、御教化と願ひ申す。聖人盛綱が突起の心を聞けり。殆ど歡びつひ滅み、汝乱世の時ふ生じ、と言わく。若年の昔より衰老の今に至り、多くの人を殺し、罪業を作りと深重あり。地獄必定ありて遁る期更ふ有へず。然れども今阿弥陀佛の本願に汝の五逆十惡の凡夫を救せむらんが為の悲願あり。我身の罪深きと願を只一心に佛の大悲願を信し奉り。我後世の一大事御助け候りと深く如来とて奉らば、弥陀仏に忽ち遍照の光明を故ち給ひ、汝が身を彼光明の中へ納め取り、再び捨つらん。命終の時ふ臨んで速に安樂浄土へ迎へ取給ふ。から廣大不思議の佛恩を報じ、為らぬ餘念なく、一心に専ら稱名念仏し、必命と期とんべし。努々疑ふと有べし。甚き

と御教化遊ばし、うく盛綱忽ち歡喜の泪を咽び、直に他力信心に決定して終ふ聖人の御弟子と知し、聖人則法名法善房光實と授け、爾後法善房の越前國橋立に一字と建立し、真宗寺と号し、祖師聖人御真筆の十字に名号とよへ給ひ、今此名号を安置せしむ。

一説に法善房光實の佐々木盛綱の玄孫として、佐々木三郎光實あり、顯智房の門弟として越前國の化導し、橋立に一字と建立し、竟正元々年七月二日寂し、何れ是れを知らん。

按るに信州西森郷正行寺の什物に盛綱高綱大夫房聖人

連座の眞影あり、法善房盛綱の事なり。佐々木四郎高綱の三郎盛綱の弟として、一騎當千の勇士として、源頼朝伊豆國又義兵を揚げ、驕るる平氏と対し、相摸國石橋山に合戦を、然るに軍勝



利を得ず散々敗北し僅か主従七騎討たれし肥の杉山より逃のひ給  
 所平家の勇臣大庭三郎大軍より追ひつゝ此時頼朝と云ん危ふ  
 うり此佐々木高綱一人取りし寄来り大軍の群ら中と縦横無盡に  
 伐入り七度まで血戦し拒み程に終に頼朝危急を免る。此度の勲功  
 拔群ありと頼朝感賞の余り高綱と近く招きり我り天運の叶ひ平家  
 を止し天下と掌握する者や日本半国を割る你ふよん云へり果して  
 頼朝の威勢日く朝日の昇るごとく。平家一族悉く西海に  
 波上漂流せ終に主上及び一門残らず巨泉の腹中へ葬り頼朝天下を併吞  
 し征夷大將軍の重職を賜り刺し國々追補使を置き政刑惣に頼朝卿  
 の手裏ありと云ひ佐々木高綱は約束の如く日本半國を賜るも左の無

しと倭に中国七州の司として置とる。爰に於て高綱との誓約の如くはたそ  
 憤り思ひ且の清世の形勢と觀し見ふに嗚呼浮世の只轉變の習ひあり。今日  
 思ふ事翌日の變易と我々我々を定むる變易に況や他人の詞と  
 今歡樂の味を遊ぶ。後の阿鼻の大城に向ふ假令天下を二統と  
 唯夢の戲と思へ。豈人として恨むらんや。五欲の肴を貪る。三毒の酒  
 小醉臥んよう。菩提の道入る。佛果を悟らん。如く。忽高野山金剛峰  
 寺を登り出家し弘法大師の信。真言密法を修行せり。然るも難行此  
 道遙く遠くし行はざり。事往ら。妄念の闇に迷ふ。昏々。高綱入道  
 難解の修。がを悲むの処。宿縁の善因爰に招く。聖八越後國に配  
 流せり。其地あり。他力易行の法を弘教。く代聞つ。急ぎ高野山を

見録 一代 備前巻之五



退きて遙の海川と越て越後ふ下向。國府の草庵み泰り聖人ふ渴々奉る。  
祖師聖人高綱の出家せし姿成見り。坐ふ御涙と浮め。高綱もよみ  
泪と袖ふ添ふ。發心の因縁日頃の意趣と演わ。御教導の久き夏と  
願ふ聖人高綱が起實と感と。珠更示し宣く汝賢くも發起心の真成  
頭。是宿縁のゆる所。有為轉寔の界。夢のど。又幻  
の。然るに底下薄地の凡夫造悪不善の族善根の功德の種も。修行学  
道の功も積されども。速に佛果に至るの直道。弥陀本弘の誓願。過ぐる夏は  
此誓願。深く信心。三世の諸佛の濟度。逆の罪人。十方  
淨刹の門戸と閉され。垢穢の女人も直に安養の淨刹に至る。無上覺と  
證る事。露も疑ひ有べ。早く一念發起の淨信より。稱名念

佛の正業と勤む。最に御教化。給ふ爰に。高綱立所。他力易行の旨趣と受得。往生決定の領解と究め。竟に眞の御弟子と成り  
法号と了智と賜り。尚も數く御勸化の益と蒙り。所縁に依り信濃國  
小立越栗林の郷。一字と建立し。正行寺と号け。専ら稱名念仏。心すること  
一説。小佐々木四郎高綱。頼朝卿の約諾。遠愛の事。憤。既。小謀  
叛と企んとせし。時。西佛房。大。夫。房。覺。明。高綱。送る。一。書。小。曰。く  
殘水小魚貪食不知時渴。糞中穢虫爭居不知外清。  
斯の書。送る。高綱も聰明の人。此二句の意。悟り得。謀叛と云。発心せし。云。此事。否や。祥小。せん。

○ 眞壁眞佛房之傳

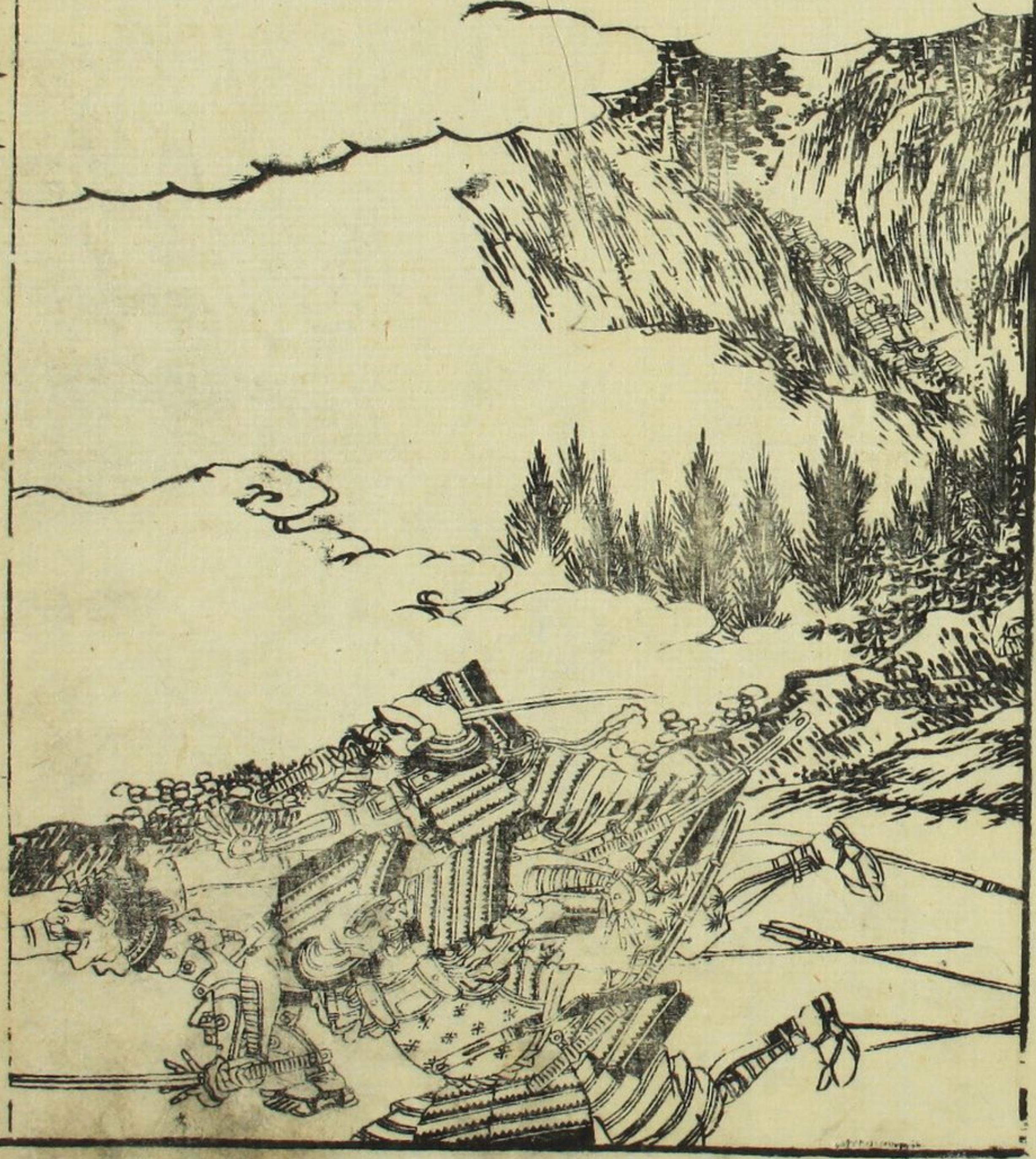


佐々木高綱  
石橋山小  
頼朝と助く

頼朝は左馬頭義朝の  
三男より伊豆國蛭の  
小嶋に流され後小共と  
起し相模國にありしを  
大庭景親と石橋山小  
戦ひ軍敗まじし僅か七  
騎あり既而危き



佐々木高綱  
七度血戦  
頼朝と助け  
比類なき勲功  
とすべし





真佛房の姓ハ平氏にして桓武天皇の苗裔鎮守府將軍國香卿の後胤下野の國司國春の嫡男なり俗稱推尾弥三郎春時と号す曾々父母一子と譽れ嘆き常州推尾山の神小祈靈驗を得ず此春時と設く依之推尾と有りて家名と云十四歳ありて才智衆ふ超え父を助け政道を聞ふふ百姓を其判断の明白あるを恐る聊も謀計と巧むり有りて意廣く一曾々欲心あり哀憐の氣性ありてたゞ重罪の徒と云ども殺と克を嫌ひり有りて父國春ありて春時此器量試んかふあり問く云夫一國と司る職ハ善なる者ハ賞を下し惡なる者ハ罪を行ふも政道の平きをあれ汝ハ裁断ハ望むごとく如何ある死罪ハ者とも聊の理とつけ殺罪を免と凡斯のとくありんか蕃々の輩罪を恐れどて却く科人多かりし汝ガ意ソんとし思ふと春時答く云某幼若の身ありて

深き意を知らん然と云ども情あり見れば閻魔王ハ六道の罪を决断する職として人ハ地獄ハ墮れと云ども夫とも見懲せられんか閻王の庭ハ罪人の絶ふ間あり又佛ハ慈悲を職としてつある惡人とも救ひりんか夫ハ後りて佛の浄土ハ惡人ありとも聞候は抑一國の民ハ閻王の嚴と政道をや好む候とや又佛の慈悲を好む候と某ハ唯百姓万民の好む所ハ從ひ侍らん存する計あり候ありと云給ハ父國春も理ハ伏して我子ありて賢者の器量あり悦びんか國中の人ハ是ハ聞つんか天晴民の父母ともなはし罪あり一命と失ありとも此人の裁断ハ逢く死らんこそ生前の悦びんかと申る十五歳の頃よりして聖人の徳を慕ひ持々禪房ハ参りて舍那弘願の深意を聞りて他カ佛乘の旨を窺ふ十六歳の三月中旬聖人の稲田の草



庵小来入して。重々他力法門の奥義を問う。聖人宣く他力の義を以て  
 義と様を以て様と云ふ。他力の姿を侍りて云く。春時感心の形勢を以て  
 に頭を傾け涙を流し。後に向ひて涙を拭ひ。低きと聖人小暇乞。竹塚と  
 下らむ。悲哀の声して。けしきす。人小渴見。日むらひ。此聖人と  
 唯佛とば。思ひに。唐土の孔子と見え。昔朝の宣化の帝と見ゆ。と  
 稱賛し。首と地上につけ。礼拝して。帰られ。折り。乘然房あり。と。御庵  
 室より。此体と見ると。之ども。其意。或知ふ事。後の時。又参ら。小退  
 出の折。順信房の尋。て云く。先の。宣ひ。如何の意。小  
 候。ふらんと。春時。義。と。様。と。唯佛  
 の法。人師の私。法。異国の孔子の唯先王の道を述。後人私の法と

の。む。吾朝の宣化天皇の朕の天の法度を行。王の法度を行。宣  
 へ。私。所。是。按。三。人。一。聖人あり。思。れ。儘  
 斯。の。申。候。ひ。と。て。帰。ら。聖人これと聞。て。明日。人集會  
 の。み。仰。られ。昨日。春時の一言。の。何。と。聞。つ。當。初。大師上  
 人。御。弟子。三百。余人。の中。あり。斯。の。一言。申。する。人。無。り。幼。若。の  
 人。多。し。他。力。法。門。に。於。て。聖。学。法。印。熊。谷。入。道。と。云。く。火。一。段。勝。つ。と。覺。り  
 ぶ。と。感激。余。り。見。給。へ。春。時。亦。ら。の。を。聞。く。聖。人。小。帰。仰  
 わ。と。恰。も。孩。兒。の。母。と。思。ふ。深。く。爾。と。偏。小。浄。土。の。法。門。を。学。ぶ  
 繁。用。の。時。も。是。を。捨。て。行。住。も。道。を。閑。し。飲。食。の。間。も。口  
 小。文。代。福。と。云。く。十七。歳。の。十月。祖。師。聖。人。と。招。請。し。剃。髮。し。竟。小。御。弟



子と成り。既して学三藏に通じ。利他を以て任とて常々聖人を助を  
 高田の寺務を預り。又時小城州山科小掇化し。寛喜元年の秋聖人を教  
 行信澄の奥義と相承し。同き冬祖師の命を随ひ。諸弟のうちに選抜集卷  
 教行信澄と講説し。貞永元年高田注職の後。或ハ奥州小下へ三川  
 邪義と推し。又甲斐信濃の兩國小至り。勸化し。小道俗草の風を靡く。  
 如し。四十六歳鹿嶋の神官等が招請を依り。往生要集と講説し。四方  
 の衆人集り。聞き信傍とも。帰依し。四十七歳より別請あり。し給ふ。  
 唯自行と勵む。勤めり。四十九歳十月京都小到り。祖師聖人を拜し。十月下旬  
 高田小下向し。此時聖人に辞し。宣し。生死の道定め。命終の  
 期あり。然るも真佛が如し。明年の春必だ娑婆界と去ん。今日の面

謁し。爾浮の永き別を人再會と浄土小待奉る。聖人も最悲しく思  
 召す。夜と共に苦集滅道の邊まで送て。たひ小袖を濡し。別れり。五十  
 歳二月より日毎小門弟の道俗を招き。教勸し。是浮世の永き別と  
 示す。三月朔日衆人小暇乞し。引籠り。偏小誦經念佛し。唯大内  
 の専空長沼の信性の両僧の給仕せり。顯智專信ハ此時都小。同き五日  
 近国の門人と招く。常陸下総上野陸奥等の門弟競ひ集り。圍繞せり。日  
 八日夜の刻新浄の法衣を着し。諸弟又告て曰く。これ今日安養小往生。各  
 勤行と始し。如来堂の正面小端座合掌し。本尊小相對ふ。諸弟聲を  
 鳴し。伽陀を奉称。名合雜と末の刻に至り。真佛上人ひり。高声念佛四十  
 八遍。往生不劣。諸善業端座合掌。證無為。唱へ。坐し。化寂し。



維時正嘉二戊午歲三月八日。三日。至。送葬。身體。頗。合掌。み。れ。ず。春秋五十歲。高田山の住職。凡二十七年。あり。

○井東顯智房之傳

顯智房。元化生の人。我後國。余五將軍の後胤。井東基知と。よ。の。り。常。富士山の神と信。或。年。富士山。詣。つ。天池の辺。一人の童子。あり。と。立。見。五六歳計。髪長。垂。く。双。眼。小。稜。あり。童子の。い。き。我。此。嶽。の。神。の。子。あり。願。く。い。ふ。が。子。と。な。ん。と。因。り。伴。ひ。て。家。又。帰。り。子。と。し。故。不。平。と。氏。と。い。ふ。書。と。讀。し。む。お。至。く。一。と。聞。く。十。小。通。也。一。日。國。上。寺。の。僧。順。範。の。童。子。と。見。く。云。く。是。神。人。又。り。と。ん。ん。恐。ろ。く。ハ。菩薩。の。應。現。わ。る。む。凡。俗。の。家。お。め。し。の。か。く。く。と。乞。得。く。弟子。と。し。然。る。不。其。為。體。聰。敏。く。て。凡。か。く。順。範。

は。り。是。と。相。く。曰。中。く。我。小。と。の。不。徳。者。の。弟子。と。と。ん。ん。人。小。非。ず。と。自。ら。叡。山。小。伴。ひ。て。東。塔。の。覺。賢。僧。都。の。坊。小。入。り。出。家。得。度。を。得。し。号。け。く。國。上。の。君。賢。順。と。し。是。則。覺。賢。と。順。範。二。師。の。名。を。取。れ。ん。と。斯。く。学。業。日。々。小。怠。ら。ん。好。く。法。華。華。嚴。を。讀。や。大。旨。を。曉。る。叡。山。小。住。す。ふ。と。十。年。小。く。師。父。を。思。ひ。て。故。郷。の。越。後。小。歸。り。小。此。時。順。範。と。と。に。寂。し。基。知。夫。婦。も。又。死。去。せ。り。賢。順。悲。嘆。し。て。思。ひ。て。学。業。し。て。終。に。故。郷。に。顧。り。事。の。暫。く。師。匠。父。母。小。見。へ。ん。が。為。ら。う。今。師。父。と。も。小。失。り。ひ。ぬ。無。常。の。頼。り。も。な。し。斯。の。と。し。嗚。呼。す。や。う。に。名。利。の。罾。と。脱。く。偏。小。出。離。の。直。道。小。趣。み。少。く。あ。が。と。一。時。國。の。國。分。寺。小。擬。ふ。に。祖。師。聖。人。の。御。教。化。乃。利益。と。結。る。者。あり。賢。順。と。と。を。聞。く。感。ふ。絶。ぶ。直。に。下。野。國。高。田。小。り。ひ。く。と。



此と凡聖人の常陸下総と教勸くつひ。唯真佛房のよ高田ふりて依て  
 暫く門下よをまう真宗の法門と聽ようう自得し。實生死の煩籠と  
 出く大荒ふ昇り。萬人と引く苦海と渡るの術これ過るはなり。時近江  
 衆畑の專信来り。日く門下ふく。故ふ二人常小睦く實意を尽しと  
 各國ふ帰る。專修の道と練磨を。明年再び高田ふ来り。祖師聖人ふ拜  
 渴を。去年の約ふより。專信も又来り。真佛房兩個と吹擧し。聖人の御  
 弟子とせせり。則賢順と改め顯智と名づけらる。于時安貞二年戊子五月二  
 日あり。尔後昼夜祖師を従ひ。浄土の教相真宗の奥義と学び師命よりんく  
 勢州と化度し。或は教ふ随ひく。叡山三井寺等ふ入る。舎那止觀の奥義と学  
 び。南都も移りて。華嚴唯識の幽旨を聞り。南北の諸師その俊智と称

讚を仁治元年聖人より。教行信證と相承し。又師命と受け。遠近の諸國小住  
 て教化と施し。建長七年祖師聖人の真影と圖画せられ。祖師筆とんく  
 銘文と題し。まこと附屬し。且教行信證の温奥と問答するふ及び。二十二箇の  
 精決と得り。後ふ祖師御消息と賜り。顯智の親寫が再回り。成るるを  
 候ふ也と宣へ。此顯智上人といふ。原来不測の神足なり。高田住職。正嘉二年十二月  
 の後。毎年二三度上洛し。祖師ふ拜渴し。道路の化導益々盛なり。弘長元年  
 北國勸化の時。日光山ふ参詣し。ふ権現巫ふ託し。浄土の法門と聽聞し。法名  
 と請ふ。よ。性海と授けらる。其年の冬。白衣の老翁。太刀一口と携へ来りて  
 云く。我の日光山の辺に住り。くの太刀の盜賊火難と守る。靈驗なり。買求め  
 寺院の鎮護とせし。人。上人其質と問ふ。老翁笑ひて云く。此價の先達て



井東基知

富士山上小

神童に



富士山、駿河小隸、四ヶ  
国を跨ぶ南西、駿州東北の  
相州北西、甲州巽、少くも  
跨る凡、関東八州よりこれと  
望み山の形異なり、唯北  
面へ山脚長く南面は殊  
峻岨あり甲州より登ると  
者田口といふ駿州より登る  
大宮口といふ相州より登る成  
蹊走と云ふ、其三處は各  
淺河の神社あり且  
坊舎神職寺あり  
守護と





性海ふ賜へりとも。西ふ迎ひて立去り。忽ち其行方を知らず。是正しく日光  
權現受法の謝礼ふ擬せり。處ありし。祖師聖人入滅の後大谷の地を求めり。  
御廟堂を建立あり。正慶三年七月四日辰の刻。正慶三年小建武と改元。許多の門  
徒を集め香を焚き。経を讀誦し念佛を唱へ遺戒を詳ふ。頓起り  
金堂へ入り。徒弟等と追り金堂の扉を開け。忽ち其行方を失ひ堂内へ  
拂子一柄のこぼる。然るに當日午の刻伊勢國川曲郡ふ坐し。說法一日没ふ  
至り又行去と失ふ此故お七月四日と以て滅日お定む。又嘗て祖師一代の選述  
及び門人ふふらふ消息までも結集ときる。今時祖師聖人の教化は書卷天  
下の流布する。夏に専ら此上人の力よふ所ありとも。

○大内專空房之傳

大内專空房の俗姓平氏鎮守府將軍國香卿の後胤下野國芳賀郡真岡の  
城主大内国行の三男なり。俗稱大内冠者行弘と号す。幼推しり聰明俊智  
人なり。安貞二年戊子五月十日高田に於て祖師聖人の弟子。ふらふ于時  
年十八歳なり。聖人上洛の後奥州へ下り是信元為信等より示し合は所を教  
化を施し立川の邪義を推し去る。允陸奥の弘法に此專空より盛んありとも。弘  
安二年己卯專空重病なり。既ふ危ありを見へり。然るに一夕独りの神人  
来り。紫色の菌を授けり。云く是百年の靈芝なり。食せば病速く治  
せんと告ぐ。往方あり。即專空これを服用せり。病疾はち石ちに平愈せ  
と云ふ。正應二年己丑三月顯智上人より高田專修寺の住持職を受り。是  
亦ひく祖師聖人の嚴命ありしよし。永仁四年丙申上洛して。



大谷の御廟地分内を狭くして以南隣なる青蓮院の門侶良海律師の園地を買ひて其境内を廣く此時の北城東西の面各十丈南の面十三丈五尺北の面十丈七尺也康永二年癸亥六月二日高田山の第五世の住持職で真弟定專房を譲りて同年十二月十八日の早朝道俗を集め説法一々の事日中および未の刻より西方に向ひ合掌と胸より念佛數遍。園林穢國在百年彈指之間入寶池と唱へて声と俱み大往生と遂に畢ぬ年齢一百三十歳高田山の住職五十年と云ふ世に真佛顯智專空の二師と称して祖師面授の三傑と云ふ然るに真佛顯智の西上人の持戒精嚴として弘願を宣揚し專空上人の迹を在家に均せし念佛を弘通し人々是の行状の如く衆生利益の宜き事なりと云ふ者あり斯の如く行

迹の異あれとも傳法傳戒の兩脉展轉相兼一器の如くを一器の如く行

○飯沼性信房之傳

飯沼の性信房俗姓大中原常陸國鹿嶋郡の人なり幼名惡五郎と云ふ後与四郎 大力無双勇猛強勢なり心性狼戾なり曾て礼法を拘りて順壤の心を改む 元久二年の春十八歳にして諸国武者修行して其歸る都に至り國々巡行せしがゆりて紀州熊野權現の詣りて其歸る都に至り 適東山吉水に参詣し其項法然上人吉水の禪坊に於て本願他力の妙要を説せらる彌陀超世の悲願とのん十惡の凡夫五逆の罪人も捨けし救ひ給ふんとす誓ひをなれ惡逆の身をも願は偏不如來の悲願を言て奉る一念稱



名念仏とんば決定して彼國に往生せん事。更無疑ひ有べし。甚尊くも教化  
 せしむるの聽聞の貴賤道俗門前より市となり。雖も一ふきかへし。四郎縁端  
 又何うも聽聞しつらう。宿習の善因今爰に顯つてし。上人の教化ひりしと胸  
 よこへ坐み難有尊とくを多し。涙わづらふ上人の御前より出敬。白く曰く。  
 我ハ東國常陸の者あり。年来の所為り。たゞ物の命を殺し。人をも殺し。惡逆  
 との業と。佛法聽聞ハ今日が初あり。然るふかふ罪深し。我等どうとも。  
 弥陀の大悲にて救ふを給ふとの御教化のりく難有こそ候らん。何れも  
 願ふハ御弟子とあり。かふ惡人との化導あり。給ふれり。其終誓と切  
 く堅固の信者とあり。法然上人と四郎。實り志しと感と。切も  
 世に殊勝あり。若者なり。善信房。聖人の御弟子とあり。能く教化とせ

うり。老年の源空と相従ふも幾の年。隨身見。御房の年若し。行末弘  
 法のかみ成へき者あり。と宣ひ。聖人の御弟子と賜り。此も聖人三  
 十四歳と四郎十八歳あり。祖師聖人と四郎と對し。重くも他力往生の旨を  
 わんごうと示し。則法名と性信と号け給ひ。是より性信房の聖人  
 又常隨して暫くも御側を故に奉つ。配所へ趣き。ある時坂本へ立越。こ  
 稲田の居と占り。常に御身つ。まの申す。貞永元年聖人六十歳御  
 上洛の折。性信房御供。登ら。既相州箱根山。聖人の仰  
 り。關東。葉一回。此性信房。預けり。名残り。師命の重  
 き。隨ひ。謹と表。と泪と俱。聖人。引別。下総國。横曾根。以。專修念  
 佛。と弘通。り。道俗。歸依。し。門前。市。と。爰。爰。性信佛閣と



建立いよいよ宗風と壯んよせんとも。其地代求むふふ幸ひあるうた飯沼と  
以廣く江河りて四方の景色りつるも勝るうとも。性信此飯沼と埋  
數十丁。其中小佛閣と宮立し。都の聖人へも其由と仰上りも。六聖人甚  
御喜悅りつる。則寺号と報恩寺と下し給ふ。性信此佛閣ふむと弘願真  
實の教法。專念称名の行業と説弘めらる。一は貴賤道俗群参し。帰依信  
心をもると。聖人この地よりして。教導りしせりふ異ならず。真宗の繁栄  
日よすし。さうん。さうり

○鹿島順信房一谷成然房之傳

鹿島順信房其初は常陸國鹿嶋郡鹿島太神官の神官なり。守岡尾張權  
守信親といひし人なり。明神聖人の恩徳と渴仰のある。師弟の御契約しし。

法名は信海と授り。未だ渴せざるに忽ち聖人と尊信し。稲田ふ参りて。御弟子と成り。法名と

順信と号し。鳥栖無量壽寺の寺務とぞ蒙り。又南莊の乘然房の鹿嶋  
の信親が舍弟なり。旧武人より俗姓は藤原鎌子内大臣の後裔尾張守親

綱と。武術と超練し。力飽るも強く。万夫不當の驍勇なり。然るに舍兄信  
親聖人より帰依し奉り。念佛の行者とありし。親綱も俱ふ聖人の化導と蒙り。

忽ち安心獲得し。竟るに侶ふ加り。于時貞應元年あり。今後信田か如  
來寺と乘然房相續し。専ら弘法化益なり。

○一谷成然房の旧は九條家の貴族中村中将行實卿といふ人也。妻は前出其

○野田西念房之傳



野田の西念房の俗姓は人皇五十六代清和天皇の苗裔八幡太郎義家の孫讚

岐守満實對馬守義親の子の信濃國高井郡井上の城に住し井上次郎満

實と号す其子井上五郎盛長の息宇野三郎源貞親といふ人なり六歳に

時文治五年父盛長戰場に於て討死す夫より母は相具せられ同國水

内郡駒沢に移住し廿六歳の母を失ひ貞親の志を頼りて

越後國五智の如来へ參籠し明師に値遇せんと祈る一七日満る夜

夢をもち現るあり五佛顯然と告ぐ曰く你有為轉變の娑婆界

と厭ふ善提の道入人事を思ふ誠の奇特の志あり幸あるを今爰に真

の知識を其名と善信房親寫といふ彼師に隨從し教化を蒙るべしと

新に大なる靈告は蒙り奉り急ぎ聖人の草庵に至り發心の志如来の靈

告と誥を伏し御教化を願ひ奉れ聖人即彼が為他力本願の不可思議と

然し凡夫往生の安心は最懇示し自らも貞親隨喜の泪を咽びて所は

信心發得し御弟子といふを願ふ聖人これを受し西念と名を賜り

く宿縁のわざ有難き是より西念日夜祖師聖人常隨し稱念

佛念ると大なる功が後武州足立郡野田といふ所の一宇の寺を管し専ら弘

願一乘の宗風を傳へ祖師聖人御入滅の後といふも弘教化壯んたるが正應三

年御本願第三世覺如上人關東御經廻の時西念いも存命して百七歳に

覺如上人は偈し奉り以上人大歡ひり西念對し祖師御相傳の安

心と尋り西念房やが祖師聖人より口授相傳する所の安心起行の

滞るる演説し程に覺如上人數々歡喜し御房の年齢百

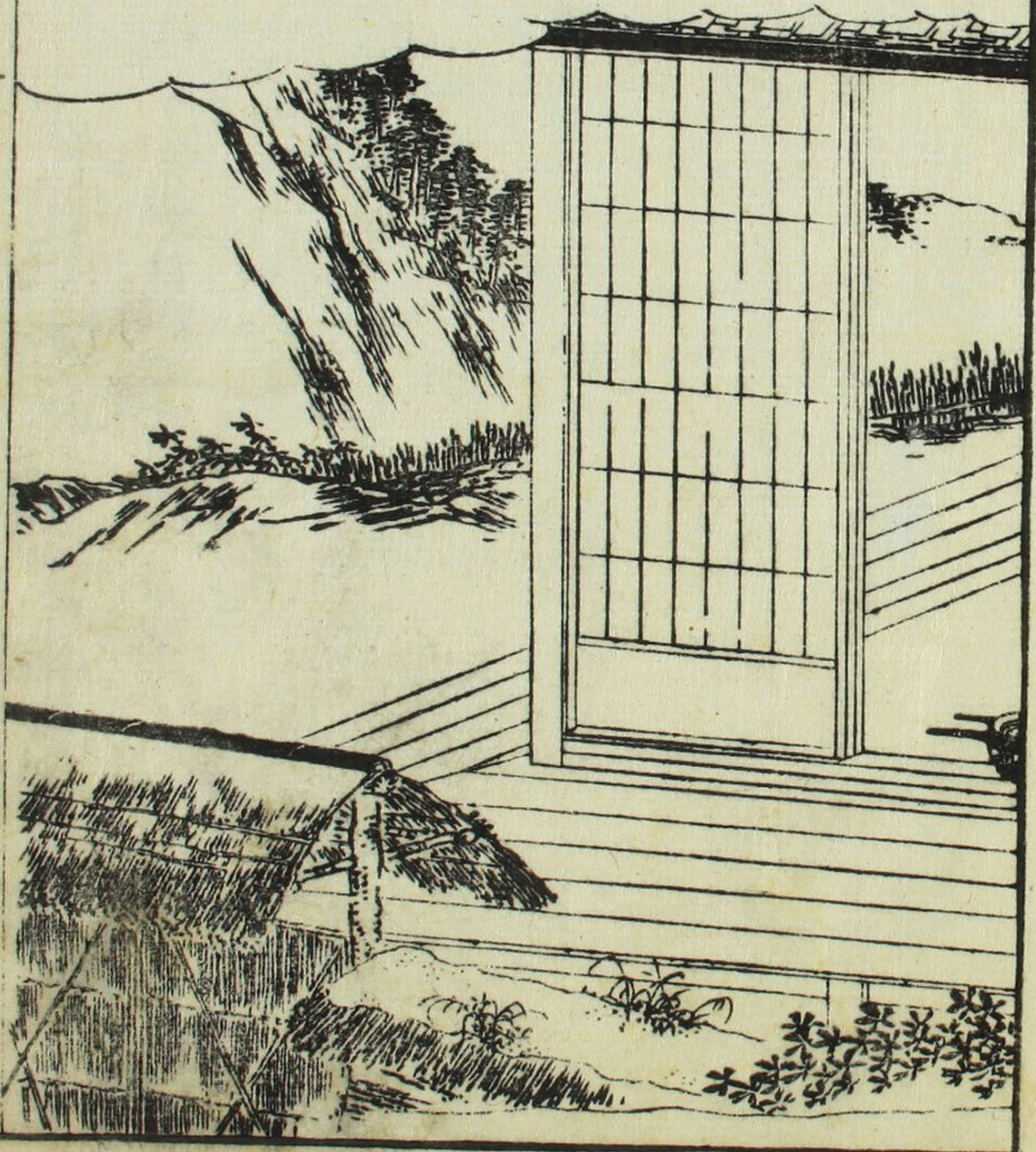


島山重忠  
護心

島山重忠ハ源家  
先鋒の將トシテ天性  
寛大トシテ功有リ  
伐チ智ヲシテ事  
人ニシテ其徳ヲ服  
元久年中朝獲  
護心トシテ武藏國  
豊嶋郡二俣川ニ



於テ力戦數回シテ  
幸ニ其二男戰場ト  
道ヲシテ父兄一族  
菩提ノ為ニ出家  
住證房ト稱レ





七しを積り極衰老の耄言。忘失の義も有べし。其言殆どやうふ聖  
 人の口決少しも遠忘なく。祖師の直説と聞し異ならず。實に稱讚せらるる余り  
 わり。是全く命齡の長る徳なれば。自今以後此寺を長命寺と号しべしと  
 命とりし時西念房其翌年百八歳と命終し。三月十五日せむお悩む  
 かく端坐合掌し觀彼如来本願力の文と誦し。念佛數百遍唱へて。俱ふ  
 息絶大往生と遂畢ぬ。二十四輩死古傳ふけりぬ  
 法然上人の弟子とす不覺

○ 狗飼證性房之傳

狗飼の證性房は俗姓は桓武天皇の後胤鎮守府將軍上総介良兼四代の末  
 孫左衛門尉致經五男秩父六郎將恒八七代の嫡流畠山次郎重忠の二男小  
 次郎重秀あり。然るに父重忠及び舎瓦重保傳言よりて誅伐せしむる。

此時重秀年二十三父と同日討死せし由流布せしめ密に身と遁れ京  
 師ふ登り。拇尾明恵上人の禪室に至り。人司り不定芭蕉泡沫と等しく。就  
 中武門のあつひ夕朝と期とぐくげ。さあとも今度我父重忠舎瓦重保と  
 始め一族郎等に至ふまで。非命の怨致と事。我その子弟の身とく。存命  
 とくき者あり孫と根株をいかに盡とくか。誰一人菩提を訪むのあり。類は  
 冤魂わが惡趣に墮落し。修羅の妄執散らるの時更ふなり。是は依て我  
 一人武と菩提の為ふ捨耻と出離の道ふ忍び。竊ふ法味と甘んず。是を  
 推参らる。あれ上人大慈とわれうの圓融のまをて示し人。泪と俱願ひしを。  
 明恵上人いと殊勝の事ふ思しう。即渠が為ふ華嚴一乘の法と懇懃と諭し  
 う。重秀歡喜踊躍し絶也。剃髮染衣の身とす。名も惠空と改め上人ふ



隨從<sup>じゆんじゆ</sup>。菩提<sup>ぼだい</sup>を勤<sup>つと</sup>むふと甚<sup>し</sup>深<sup>しん</sup>切<sup>けつ</sup>なる。斯<sup>かく</sup>に年月<sup>ねんげつ</sup>と積<sup>つ</sup>とゞども。聖道<sup>せいどう</sup>は難<sup>がた</sup>  
 行<sup>ぎやう</sup>苟<sup>も</sup>且<sup>かつ</sup>修<sup>しゆ</sup>く。圓頓<sup>えんどん</sup>の一乘<sup>いちじやう</sup>容易<sup>じゆんぎ</sup>悟<sup>ご</sup>得<sup>とく</sup>事<sup>じ</sup>能<sup>ぞう</sup>はされが。惠空<sup>ゑくう</sup>暗<sup>あん</sup>く思<sup>し</sup>へらく。  
 人<sup>ひと</sup>もの長<sup>なが</sup>く所<sup>ところ</sup>りく。身<sup>み</sup>を負<sup>お</sup>りぬ業<sup>ごう</sup>と強<sup>つよ</sup>くをえんとせ。千<sup>せん</sup>百<sup>ひやく</sup>年<sup>ねん</sup>と經<sup>へ</sup>ふ  
 とも終<sup>つひ</sup>ふ其<sup>その</sup>甲<sup>が</sup>斐<sup>ひ</sup>有<sup>あ</sup>べ。然<sup>しか</sup>ふと人<sup>ひと</sup>間<sup>ま</sup>らぶ。六<sup>む</sup>十<sup>じゆ</sup>年<sup>ねん</sup>。今<sup>いま</sup>既<sup>すで</sup>ふ其<sup>その</sup>半<sup>はん</sup>ふ  
 及<sup>およ</sup>ん。于<sup>この</sup>時<sup>とき</sup>年<sup>ねん</sup>限<sup>げん</sup>りる年<sup>ねん</sup>を以<sup>も</sup>て限<sup>げん</sup>り。あきの行<sup>ぎやう</sup>ひを修<sup>しゆ</sup>せん。是<sup>こゝ</sup>は愚<sup>ぐ</sup>なる  
 ち。我<sup>われ</sup>も今<sup>いま</sup>東方<sup>とうほう</sup>ふ他<sup>た</sup>力<sup>りき</sup>真<sup>ま</sup>宗<sup>そう</sup>とく。易<sup>い</sup>行<sup>ぎやう</sup>直<sup>ちき</sup>入<sup>にゅう</sup>の法<sup>ほふ</sup>盛<sup>さか</sup>ん。行<sup>ぎやう</sup>の速<sup>すみ</sup>く  
 是<sup>こゝ</sup>は附<sup>つ</sup>ん。如<sup>ごと</sup>く。乃<sup>すなは</sup>ち元<sup>げん</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じゆ</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>。夜<sup>よ</sup>あつと山<sup>やま</sup>と忍<sup>しの</sup>びて。  
 東<sup>とう</sup>路<sup>ろ</sup>。下<sup>くだ</sup>る。宿<sup>しゆく</sup>縁<sup>えん</sup>の浅<sup>あは</sup>く。此<sup>こゝ</sup>は祖<sup>そ</sup>師<sup>し</sup>聖<sup>せい</sup>人<sup>にん</sup>常<sup>じやう</sup>陸<sup>りく</sup>國<sup>こく</sup>小<sup>せう</sup>嶋<sup>じま</sup>郷<sup>かう</sup>  
 弘<sup>くわん</sup>法<sup>ぽふ</sup>ま。直<sup>ちき</sup>は彼<sup>か</sup>所<sup>ところ</sup>へ立<sup>た</sup>越<sup>こ</sup>聖<sup>せい</sup>人<sup>にん</sup>の淨<sup>じやう</sup>刹<sup>せつ</sup>を尋<sup>たづ</sup>ね。来<sup>き</sup>意<sup>い</sup>と具<sup>ぐ</sup>ふ  
 物<sup>もの</sup>が。仰<sup>おほ</sup>む願<sup>ねん</sup>は菩提<sup>ぼだい</sup>の要<sup>よう</sup>路<sup>ろ</sup>。導<sup>どう</sup>とく。渴<sup>かつ</sup>仰<sup>おほ</sup>む。深<sup>ふか</sup>く。聖<sup>せい</sup>人<sup>にん</sup>

奇特<sup>きとく</sup>の思<sup>し</sup>ひを。給<sup>たま</sup>ひ夫<sup>お</sup>今<sup>いま</sup>や末<sup>ま</sup>世<sup>せい</sup>濁<sup>じやく</sup>乱<sup>らん</sup>の凡<sup>ぼん</sup>夫<sup>ぷ</sup>。聖<sup>せい</sup>道<sup>どう</sup>の修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>と成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>  
 事<sup>こと</sup>を得<sup>え</sup>ん。自<sup>みづか</sup>力<sup>りき</sup>の功<sup>こう</sup>徳<sup>とく</sup>と頼<sup>たの</sup>む。他<sup>た</sup>力<sup>りき</sup>本<sup>ほん</sup>願<sup>げん</sup>の如<sup>ごと</sup>く。打<sup>うち</sup>まを奉<sup>ほう</sup>まて。  
 雜<sup>ざ</sup>善<sup>ぜん</sup>餘<sup>よ</sup>行<sup>ぎやう</sup>と振<sup>ふ</sup>と。一<sup>いつ</sup>向<sup>きやう</sup>報<sup>ほう</sup>謝<sup>しゃ</sup>恩<sup>おん</sup>徳<sup>とく</sup>の各<sup>ご</sup>号<sup>ごう</sup>と唱<sup>な</sup>讚<sup>さん</sup>。專<sup>せん</sup>修<sup>しゆ</sup>專<sup>せん</sup>念<sup>ねん</sup>の時<sup>とき</sup>ハ  
 彼<sup>か</sup>佛<sup>ぶつ</sup>力<sup>りき</sup>不<sup>ふ</sup>可<sup>こ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>の利<sup>り</sup>益<sup>えき</sup>廣<sup>くわう</sup>大<sup>だい</sup>。自<sup>みづか</sup>己<sup>こ</sup>の往<sup>かう</sup>生<sup>じやう</sup>の決<sup>けつ</sup>定<sup>てい</sup>證<sup>じやう</sup>得<sup>とく</sup>。順<sup>じゆん</sup>次<sup>じ</sup>神<sup>しん</sup>通<sup>つう</sup>方<sup>ほう</sup>  
 便<sup>べん</sup>と以<sup>も</sup>て。有<sup>あ</sup>縁<sup>えん</sup>の衆<sup>しゆ</sup>生<sup>じやう</sup>と濟<sup>さい</sup>度<sup>ど</sup>せん。於<sup>お</sup>こ何<sup>なに</sup>もの惡<sup>あく</sup>趣<sup>しゆ</sup>は沉<sup>ちん</sup>と果<sup>くわ</sup>く親<sup>しん</sup>屬<sup>じやく</sup>も忽<sup>とつ</sup>ち  
 淨<sup>じやう</sup>土<sup>ど</sup>の東<sup>とう</sup>門<sup>もん</sup>は導<sup>どう</sup>人<sup>にん</sup>事<sup>じ</sup>。努<sup>ど</sup>々<sup>とと</sup>疑<sup>ぎ</sup>ひ有<sup>あ</sup>べ。善<sup>ぜん</sup>哉<sup>さい</sup>惠<sup>ゑ</sup>空<sup>くう</sup>つとめ。甚<sup>し</sup>密<sup>みつ</sup>教<sup>きやう</sup>  
 導<sup>どう</sup>か。給<sup>たま</sup>ひ。惠<sup>ゑ</sup>空<sup>くう</sup>の歡<sup>かん</sup>喜<sup>ぎ</sup>の泪<sup>なみだ</sup>を。立<sup>た</sup>所<sup>ところ</sup>信<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>受<sup>じゆ</sup>得<sup>とく</sup>。即<sup>すなは</sup>ち本<sup>ほん</sup>宗<sup>そう</sup>と  
 改<sup>か</sup>め。真<sup>ま</sup>宗<sup>そう</sup>又<sup>また</sup>歸<sup>き</sup>依<sup>い</sup>。奉<sup>ほう</sup>まて。程<sup>ほど</sup>小<sup>せう</sup>頓<sup>どん</sup>。名<sup>な</sup>の澄<sup>じやう</sup>性<sup>じやう</sup>と改<sup>か</sup>め。給<sup>たま</sup>ひ。御<sup>おん</sup>弟<sup>てい</sup>子<sup>し</sup>の列<sup>れつ</sup>不<sup>ふ</sup>加<sup>か</sup>り  
 々<sup>と</sup>。然<sup>しか</sup>し。以<sup>も</sup>て往<sup>かう</sup>生<sup>じやう</sup>の素<sup>そ</sup>懐<sup>くわい</sup>を。遂<sup>すなは</sup>ち。時<sup>とき</sup>小<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>八<sup>はち</sup>十<sup>じゆ</sup>四<sup>し</sup>歳<sup>さい</sup>  
 下<sup>くだ</sup>野<sup>の</sup>國<sup>こく</sup>。鹽<sup>しん</sup>屋<sup>や</sup>郡<sup>ぐん</sup>。往<sup>かう</sup>生<sup>じやう</sup>の素<sup>そ</sup>懐<sup>くわい</sup>を。遂<sup>すなは</sup>ち。時<sup>とき</sup>小<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>八<sup>はち</sup>十<sup>じゆ</sup>四<sup>し</sup>歳<sup>さい</sup>  
 傳<sup>でん</sup>云<sup>い</sup>。純<sup>じゆん</sup>性<sup>じやう</sup>房<sup>ぼう</sup>の時<sup>とき</sup>の  
 見<sup>み</sup>ら七<sup>しち</sup>室<sup>しつ</sup>の池<sup>ち</sup>の金<sup>きん</sup>色<sup>しき</sup>の



蓮華ハス六十六十根生根生其蓮華ハスの上上より妙色の菩薩妙色の菩薩端坐端坐し今今の各位各位に即ち是是高山高山一族あり你你が他他の信心信心の功德功德よりく實實の徳徳を弘弘め悲願悲願のいざなをえん悉悉皆皆津土津土の生生を受受けしとすとすのくく感徳感徳ありしありしを依依て證證性性房房坊坊舎舎と修修補補し初初の華華臺臺院院と号号けしが後後に蓮蓮生生寺寺と号号すといふ

○飯沼善性房之傳

飯沼善性房飯沼善性房凡夫凡夫の胤胤也也人王人王八十二代八十二代の聖主聖主後鳥羽院後鳥羽院第三の皇子皇子也也くまくまししせしせしが叡山叡山に登登り出家出家して周觀周觀と号号し奉奉ふ修学修学の功積功積り行徳行徳や秀秀なりなりひるが頻頻り又又隱遁隱遁の志志ありしと山山を下下り諸國諸國を行脚行脚し竟竟ふ下総國下総國のりんと國主國主豊田四郎治親豊田四郎治親が許許す逗留逗留有有しが善因善因又又值值のちありしや祖師祖師聖人聖人關東御化導關東御化導のよとを聞聞しけ建保六年建保六年御年御年二十歳二十歳頃頃稲田稲田のりんと聖人の御教御教示示て蒙蒙り御弟子御弟子とありし聖人聖人より法名法名と善性善性と授授けり貞永元年貞永元年の春春聖人聖人六十歳六十歳して稲田稲田の御坊御坊と発足発足せり都都に登登りり

時此御坊時此御坊と善性房善性房不不讓讓すへりり程程ふ善性上人の稲田淨興寺稲田淨興寺の御坊御坊第二代の住職住職として専ら聖人の遺法遺法と弘通弘通しむり文永五年文永五年八月八月廿日廿日御年七十歳七十歳して大往生大往生と遂給遂給ひぬり豊田豊田の城主城主四郎治親四郎治親の桓武天皇桓武天皇十八世十八世の孫孫として代々代々豊田豊田の城城に住住し三十三三十三小屋小屋の司司ふり世世に聞聞へり武勇武勇の武士武士也然然るる今今般周觀房般周觀房と招請招請せし佛因佛因より治親治親も俱俱ふ帰依帰依し祖師聖人と倉持村大高山倉持村大高山に屈請屈請し奉奉り專修念佛專修念佛の行者行者とありし法名法名と良信良信と賜賜ふ斯斯く善性房善性房と俱俱ふ無二無二の御弟子御弟子となれり此時此時既既ふ大高山大高山に於於て聖人御化導聖人御化導の說法說法をせらるり周觀房周觀房善性善性其御跡其御跡の徒徒ふ退轉退轉せんことを愁愁ひ即一字即一字の佛場佛場と建立建立し真宗真宗の東方東方に弘通弘通せり意意と以以て東弘寺と号号けり爰爰ふ貞永元年貞永元年聖人御帰洛聖人御帰洛せりり稲田淨興寺稲田淨興寺と善性上



人小奇ふし給ふ故善性上人も又東弘寺とあり。良信房の附屬せしめ  
 まさう。良信房東弘寺の第二世に住し。善性御房の壽像を彫刻し敬恭  
 崇信して専ら遺法を弘通せしむ。竟正應二年七月廿五日。法萬一百三歳  
 あり。當山に於て大往生を遂げり畢ぬ。

和賀是信房 并 信圓作内之傳

和賀の是信房は旧吉田大納言信明卿とす。藤原氏の技族とす。事小罪せし  
 是のひく暫く越前國に配流の身とす。坐し坐し頓く勅免せし。帰洛あり  
 べし。自ら風と心ふ感をも事つと思ふ。夫婆娑轉變の所なる老若貴  
 賤の差別なき。曾て常なる事なき。我今ねと勅免と蒙り再び雲井より昇り衆  
 花の身とす。今も無常の風は夕朝を待てぬ。や。されば今日に歡樂の法是

又列るも明日の阿鼻の大城はむ。實一期の大夏今のと死や。水く人間の交  
 まる。深く菩提の道と尋んと即ち帰洛と止り。且暮知識の値遇と求め  
 らる。然ふ或夜曉及んと不思議の靈夢あり。青衣を着る童子枕上  
 立ち唯何とさす。 **かへ善信の聖世も出。常州は法は花と** とく  
 かく三遍も吟じ。何方ともなく失ふ。信明忽ち驚き寤。つく  
 と歌の心と案ずる。教をす。まの聖と。真名も。考す。善  
 信聖と。又と。是常陸の国と。尚其所善信上人。大知識  
 あり。末世の衆生を教導あり。靈告を。判断。坐  
 感涙を催し。未だ夜深も立出。常陸も。趣。是則信明が  
 宿因發達の時あり。靈夢に任せ。彼地も。尋訪。里人。答へる。ハ



其善信と申す。即親鸞聖人の御事。此程は是より遠き小島の郷ふ  
 まり。専ら弘法勸化とあり給ひ。滅ぶ有がさ知識。人皆如来の御  
 再誕とこそ申さう。信明の奇異の思ひとあり。直小島の里  
 よい。聖人は濁り奉る。大誓の悲願。衆生の愚も。出離れ  
 道に誘ひ。門下の末席。加へられし。渴仰の涙。打た  
 たる。聖人も其發心。一朝のことに。鑑む。則本願他力の要法。專念  
 稱名の正業。との人。末法五濁の悪世。至る。貴賤。凡下の差別。又善悪。邪  
 正の隔り。生死の患難。助らん事。自力聖道の菩提。永劫と経ふ。及ぶと  
 及ぶと。爰に弥陀本願の他力。とあり。末世凡愚の衆生。浄土にむく  
 給りんと。万機普益の御法。唯一筋。阿弥陀佛の本願力。帰命し奉る。

上の更に疑ふとあり。佛恩報謝の称名。浄土に往生せん  
 こと。大地を打つ。如く。最懇に教導。世人に信明隨喜の  
 涙。咽ひ。有難や。忝や。悪業煩惱の此身。一向に歸依。他力に任せ  
 奉る。此も助け。御本願。頼を参らせ。即ち信心獲  
 得せ。御弟子の列。加へられ。法名と。是信房と。賜り。然り  
 より。以来。且夕。聞法の利益。蒙り。常ふ。聖人は。隨ひ。御給仕。怠ら。一が  
 聖人は。是心。信心の。尊き。才の。羨む。九。量り。或時。是  
 信。夫奥州の地。元來。大國。東北の。蝦夷。接。我日本  
 の東。其の。人物。質朴。て。礼讓。専ら。自己の。力。を。偏  
 狹の。行。を。尊ひ。氣稟。の。偏。此。を。昔の。王。化。て。拒む。の。徒。や。



信明卿靈夢と  
蒙りて忽聖人の  
徒弟に加之





蜂起せり。其辺鄙の村里に至つて佛名を知らざる者。五戒を犯  
 五逆を行ひ。自業自得の罪に沈む。終は是を曉ふ。有るは廣大  
 無辺の佛願も洩れぬ。我の器もあらず。即其人あらず。彼地は立  
 越。真宗念佛の功德を弘通せん。我本懐を満るに足れ。有るは是信房  
 の今更師ふ別れ奉る。聞法の遠くを深く歎き。種々固辞せしむ。之を  
 聖人強く命じ。今師命のむ。竟別を告ぐ。奥州より趣く。之を  
 かく。陸奥斯波郡石が夷と云ふ地。弘法の梵宇を閑さ。本誓寺と号し。専ら  
 教導の場なり。易行直入の法門を。忽ち遠近の道俗。日夜に群参。是信  
 大徳の化益を蒙る。その敷を。斯有る程。一時四方又芳名高く。  
 縁を随て。他国に招請せし。教化の場。中にも信州より取つ。真宗

有縁の者あり。即彼地より。一字と起立し。弘法あり。然るに文  
 永三丙寅年十月上旬の頃。是信房の遠例より。之を。月中旬  
 十四日。頭北面西右取。念佛の声あり。大往生を遂ぐ。又此  
 吉田大納言信明卿の家臣。千原長左衛門尉と云ふ。主君越前。配流の折  
 門。家臣橋本作内と。俱不随。徒て配所より。忠勤怠らざる。其後  
 信明常陸の小嶋に。放り。聖人の御弟子と。あり。時。長左衛門尉も。俱は御  
 弟子と成り。法名を信圓と賜ふ。主入。出家。信者あり。有る。然るに  
 是信房師命に依り。奥州より下向。し時。信圓。作内。附添。下  
 信圓。斯波郡彦部に。於り。文永二年三月廿五日。終入寂。其後。被作  
 内。所。身没。其子孫。今彦部村に。あり。



○綾和魚為信房久慈善念房那珂定信房之傳

綾和の魚為信房の俗姓は清和天皇六世の苗裔伊豫守源賴義の三男甲斐守源義光新羅三郎の後胤武田太師信義の子なり。母は鹿鳴の大官司權頭源義光の女なり。奥州會津郡柳津と云ふ所あり誕生に幼年より勇猛英才群を秀で自武田信勝と名のり。同国綾和に居住せり。信勝一時庭前より山蟻多く集り。土砂と云ふ人運んぎ。一所より土室と云ふ。其中より虫ありて引いて置糧となり。住居と云ふ形勢あり。暫らく有る雀二羽飛来つ。忽ち蟻の工を拵へる。土室を破り集り居る蟻を悉く喰ひたり。信勝これをつとめてと看る。忽然と嘆息し嗚呼わと云ふ世の有りたるも墓ありて人間の境界あり。今貴賤居住の屋形は要害と構へ米穀衣類調度と貯へ妻子眷屬と養ひ水く安住

一萬歳なりと云ふと願ふ然るに無常轉變の怨敵来つ。忽ち要害堅固の居宅と責破りト代と期し。其身と殺害に眼前今蟻の為すと云ふ。全く人間の業に異なる事あり。貴賤大小も是に同じ。殊更に當時乱世暫く静あつと云ふも人心は虎狼の如く良もとれば他人の所領と奪つんと合戦いど。國郡戦争ふ弱きもの忽ちに亡び強き者も暫く勢いと振ふに似れども。僅に五十年の命と保るの少し。我此理と辨へて武と云ふげも勇と顯さうんと欲す。誠は愚さうと云ふべし。夢の如き浮世の中は蟻の造りたり。土室の如き苦悩と云ふんより早く明師に順従し。未来永劫の苦を遁れん。覺悟しけしむ。有縁の善知識の如く。時々是を尋られ。然るに宿習の善縁爰に至り。聖人常陸国稲田郷にまゐりて専ら



衆生御化導りしせり。其を聞て急ぎその地より。聖人小謁し奉り。遁世の志  
 して申上る。聖人信勝が心のなり。程と感づる。弥陀超世の悲願。汝ホ  
 如き惡逆は凡夫と浄土へ迎へり。心小称念とれば決定して。安樂の  
 生ぞんじ。更に疑ひなき趣いと。御教誡せらる。信勝これと聽聞  
 一。忽ち無二の信心と發得し。隨喜の泪を咽び。御弟子なる事と願ふ。聖人許  
 容し給ひ。即ち御剃刀を當させられ。法名と無為信と賜る。夫より常隨給  
 仕の御弟子と名う。二心なき。其後聖人都は帰る。時汝の本國又歸  
 了。弥陀の本願を弘め。予は又々。衆生を化益とす。仰渡され。無為信  
 房師命小背き難く。泣々奥州へ下られ。其時一首の歌と詠  
 於る事。なほ又の御事。此後とたのむ。わいの身は

斯く云。詠と竟無為信房の奥州宮城野郡一字と造営し。専ら化導盛  
 なる。今の仙臺の城下。称念寺の此旧跡なり。又其後同國會津郡大房と云  
 所。一字と造営し。文永元年十月廿七日。七十九歳。大往生と遂ら。寺に無為信  
 ○久慈の善念房の俗姓の平氏。桓武天皇の苗裔。三浦大助義明の弟。岡崎四  
 郎義實の孫。市左衛門實忠の三男。三浦三郎義重といひ。父實忠。和義盛  
 又同心。建保元年酉五月三日。鎌倉に於て。和田三浦の一黨。謀叛の砌討死せり。  
 時小義重十三歳あり。日四年八月十三日。鹿嶋明神小志願の事有。詣りて  
 歸る。櫻川に。甚殊勝けある老僧の渡り。や。義重  
 これと見。直ち小彼僧と負。川を越。や。豈と。人。是則祖師聖人。小  
 斯。是終小菩提の善縁と。數御勸化と蒙り。聞法隨



喜の有り。御弟子の列も加る。程に法名と善念と賜る。爰に  
 聖人彼櫻川にわたり。一字と建立し善重寺と号し。専ら弘法より。後  
 善念房の御附屬あり。此に任し教導怠る事なく。終に弘安八年十  
 月十三日。八十五歳にて入寂せり。一説に善念房の俗姓は三浦の門長田義  
 重と。方夫不當の勇士と。宿縁浅く。聖人櫻川に法延は。法延は  
 御教化を蒙り。終に御弟子と成り。法名を久慈の善念と賜ひ。祖師聖人上  
 足の門徒と。其後當國笠間より。一字と造立し教導専ら。と云未  
 何も其是非と。云々

○那荷の定信房の俗姓は。詳ならず。弱羊のむし。三井寺に入。聖道に  
 難行を修行し。圓頓一乘の理は深く。兼し三密瑜伽の法を行ふ事。一山其右の

出者。衆侶その智徳を心服と。係る程に定信自ら思へり。我修  
 得の妙法を以て衆機を化益する。唯我道は昔く者なり。や。即ち  
 志を決し。関東より下り。宿善の因縁忽ち発起の時あり。常陸國に  
 あり。聖人は對面する。小頓し。聖道高上は法を説出し。聖人と誥ん。時  
 聖人これと耳あり。唯本願一實絶待不二の要門と立。末世愚痴無智  
 の衆生。他念を交へ。一向一心に弥陀と信し奉れ。次の生に佛果を得ん。と  
 疑ひ。易施易行の法を示さん。一切藏經を説ん。勝り。即得往生  
 の道。唯他力の御法より外有へ。と。權者微妙の要決と授けり。以て定  
 信暗に法我の角と折。隨喜渴仰の思ひ深く。終に聖人の御門徒と列。と  
 信心無二の御弟子と。當國那珂郡大山の一字と草創せ。故那珂定



信房と號と

○阿輪信願房八田入信房内田道圓房之傳

阿輪の信願房ハ其俗姓清和天皇の後胤鎮守府將軍源義家公五代の孫新田太郎義俊の息なり其墳ハ上ノ下と壘ゲ下ノ上と凌グの風俗久シク世の亂トスル人事と察シ隱遁の思ハ頻々即常陸國那珂郡鳥喰村ニ避居シ藤井八郎信親ト号セテ終ニ義久元年の秋行年二十九歳ニテ祖師聖人の御弟子トナリ信願房ト名ク始メ師命ニ依リ河内國小寺ノ一宇ニ建立シ真宗ト弘通シ河内若江郡八尾 慈願寺ニシテ後又下野國那須郡粟野鹿崎ニ堂宇ト建營シ專ラ當國ニ弘法ス是鳥山慈願寺ナリ聖人ト云レ御帰洛の日ニ至リ信願房則ち之ヲ供奉シ相州御淹留内日々耽近給仕セラルガ相州の道俗聖

人の御徳と慕ひ奉り御興と云ふ御發駕殆ど延引及び種々論

うひ御上洛の後信願房ニ命ヅレ相州と教導あり給ふ此於信願房鎌倉一宇と造立し稻荷山淨妙寺ト号し勸化弘法さふ怠慢

信願房の事所々基趾とひも専ら當流ニ功勞ト重子終ニ法蘭七十八歳ニシテ文永五年戊辰三月十五日大往生ト遂ラ

○八田の入信房ハ旧常陸國那珂郡久慈の西八田郷の領家ニ八田五郎知朝ト号ス累世武勇の家トシ殊ニ知朝當時ニ在リ其譽ニ隱レリ然ルニ知朝宿因の厚故也聊菩提の道志折リ幸ヒあり子祖師聖人播原大門の郷御經廻シマセリ直小馳向少々拜謁ヲ渴仰の思ハ深ク即ち出離の要路ト問奉リ聖人殊小專修念佛の奧秘ト懇懇ニ授ク



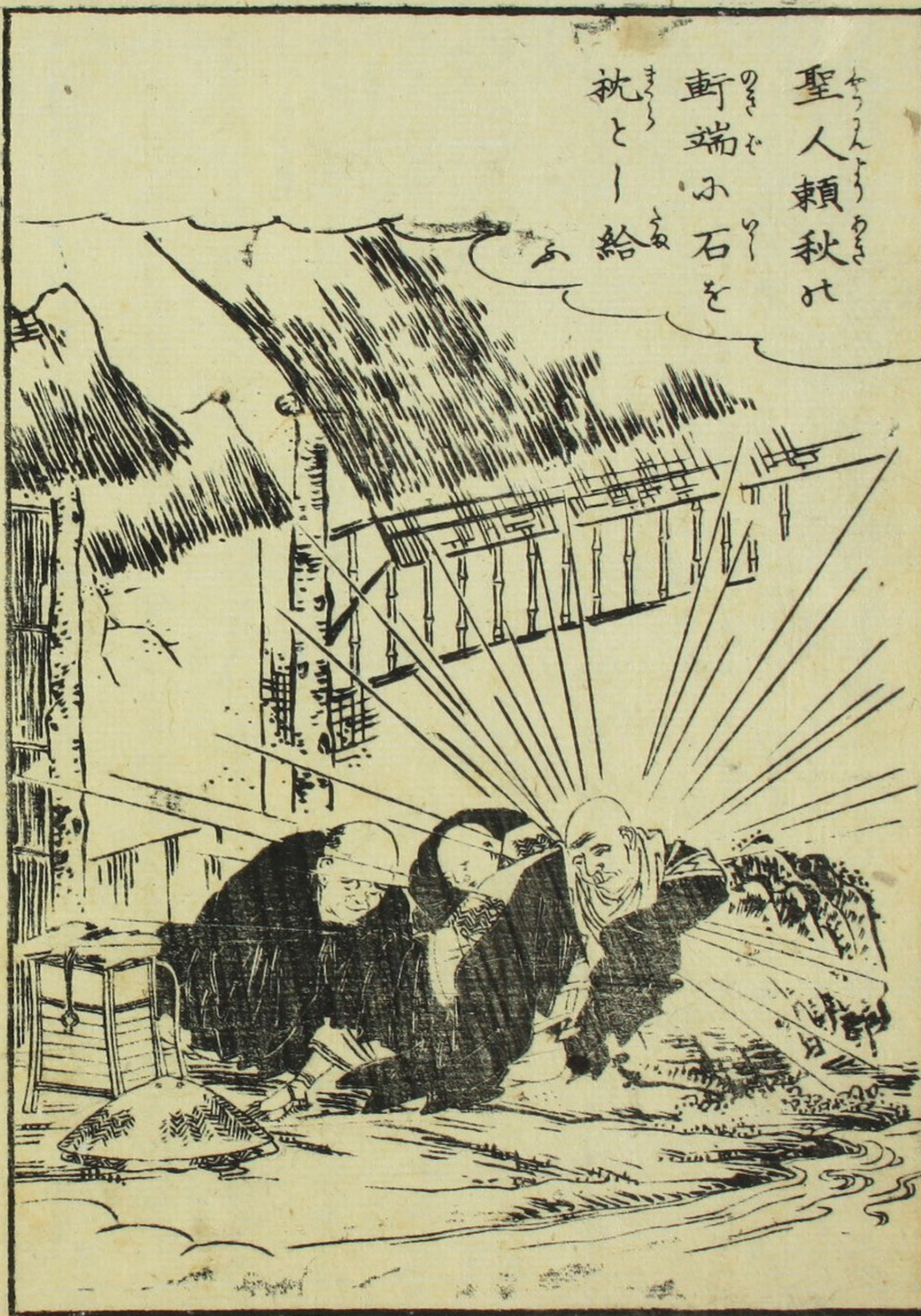
知朝立とては聞法隨喜して。師貨の約とてりるめぞ。聖人即入信と法名と  
 号けり。斯く入信房の己が屋形と廢毀し。乍ち一字は佛閣とてり。田淨福  
 寺とて号り。尔後聖人御上洛の砌。入信房御跡を慕ひ登らざり。端  
 ちう尾張国日比野運善寺といかり。聖人亦值遇し奉り。恰も嬰子の母を得  
 るとて歡ぶ事限りあり。卒に病疾起りて終に彼寺に於て往生と遂畢  
 ぬ。于時嘉禎元年乙未三月廿八日行年未詳

○内田の道圓房の舊近江國蒲生郡日野に産して。俗姓は日野左近將監頼秀が後  
 曾日野左衛門尉頼秋とてり。士あり。當時不遇して世を慧く思ふ心より。自と今  
 交りも疎く。終に流浪して常陸國久慈郡大門といふ地に逼塞して有るが頃。建  
 保五年の秋聖人當國御教化の折なり。一日此大門を徑回りて思の外に日暮て。

前路程遠く。即ち左五門が家立より宿を需めり。左五門性質むつけき  
 男あり。御覽の。我が住りも貧家なれば。ソで旅人と宿を乞ふ。とてり  
 歸りり人と。愛想あり申さる。外より。此も家居もかけ。聖人  
 強く是を乞せり。左五門以外は腹立。法師より。法去ぬ  
 けて。先を捧と受へり。有る杖をわたり。既これを打ん。聖人此形勢を  
 見り。矢庭は外面は出。日暮る。行先をみ見へ。分り。詮  
 方なり。又。茅が軒端は露を防。石を假の枕。夜寒を倍。う  
 相従ふ二三の御弟子。此御姿を見。御言人。涙  
 と共。御介抱り。参らせり。聖人少も憂ひ。夫弥陀因位の  
 御修行。肉の山と築き。血の海と。焦熱。返寒の苦惱を凌ぎ。超載。永劫身



聖人頼秋は  
軒端小石を  
枕とし給ふ









爰不於一字と造立し。更ふ聖人と請ふ奉と云れ。心より入御せり。法聞るに精まら。道圓房はく思ふや。聖人御化益御辛勞の恩徳。須弥も高きを争う。蒼海も深きを譲る。是といふ。んぞ末世の衆生。示さる。然らば物も名づけ。其意と後來。残とに如す。即ち聖人の願ひ奉り。石と枕と。く入由縁して。寺と枕石寺と号する。入西房道圓とも呼ぶとぞ。

○唯信入信念信慶西明慶等之傳

畠山の唯信房の常陸國保内。小瀬畠谷の住人。俗稱と畠谷次郎信勝と云ふ。當初祖師聖入鹿嶋與郡御化益のとき。信勝聞法隨喜して。終ふ御弟子と云ふ。金剛無二の信者と云ふ。此入り。故郷畑谷と一字と起立し。りうり弘法なりしと云ふ。

○穴澤の入信房の俗姓は清和源氏の苗裔。義景の嫡孫四郎隆義の息佐行冠者秀義の長男なり。其身武門お生れ。朝暮人間の不定と觀。大い世界の利と厭ひ。隱遁の思ひ切ると。穴沢といふ避地を菟裘とす。深く菩提の道と欣求し。自力の念佛専らして。西方の往生とぞ期する。爰は宿善発起の時。或夜不思議の靈夢あり。其様凡常如く。法衣の人忽然として來現し。你西方の往生と求る事多年して。稱名念佛怠慢なり。自力の功徳いづらに。更ふ億万劫を積む。其甲斐有べし。去れ。你信心餘念なきを愛く。今其旨趣と諭ん。欽急に小島の里に至り。親鸞聖人に謁し。奉り弥陀の密教本願他力の御勸化と蒙る。速に如来の慈海に浴とす。我は是西方の使われ。疑ふ事なれ。告る。直に天邊に飛さる。いと見。



夢さめぬ維時建保七年のころしを。入信爰おたぐ大に歡び我年来の素  
 願満足の時とれんと。急ぎ聖人の禪房に馳靈告の終は物語り伏し教示  
 以願ひつゞ聖人いと快くめづさせうひ。即ち教化しるふ様夫他力弘願の称名を  
 へ自ら一筋は後世と助らん為ふ。まをり所謂よりす。助けらるる佛智の不可思  
 議なれば。弥陀の本願末世無智の衆生とぞん。助け故えんとの御誓ふ打しつゝも  
 疑ふ心なき。諸の雜行雜修と振とて。御助一定往生の治定と。一向一心の信と奉  
 かより外は別の子細なき。斯信に參らせり上あぐり報謝の称名懈怠なき。寐くも  
 寤くも唱ふべし。唱ふ為に称名なれば。幾千万唱ふる。佛恩報謝の為と心得ん。是  
 ぞ實に他力本願の念佛なきと。いと懇に御勸化せりひ。入信忽ち其  
 意を發得し。感涙と流し歡ひ斜めけ。あを浅き一の凡夫心や。是まで自力と頼

つら事の愚はよ。から大善知識と值遇し奉らざば。今度の一大事の遂げしと  
 にわく有がやとく。聖人と三拜し。御弟子の列ふ具らん事を願ひし。聖人の  
 其志の尊きに免れ。終に御契約し。せし程に。信といふ。信心堅固して。日  
 夜朝暮に。つらとく。佛恩報謝の称名とて喜ばれり。時ふ貞應元年春二月。  
 聖人の命に依り。常陸國那珂郡大島一寺にて開闢し。壽命寺と号し。期々専ら  
 他力本願の奥旨と弘通せり。建長三年三月廿五日。あぐりの大往生とて遂げられ  
 ○奥州 念信房の俗姓源氏。清和天皇四世の孫多田滿仲四代の後裔伊豫  
 守頼義の三男新羅三郎義光の二男。光長より三葉頼氏より四男高沢伊賀守  
 氏信これより。代々弓箭の家なる。就中氏信の性稟驍勇。て。膂力人ふ絶  
 智謀兼備の武人なり。宿縁のよきや。常陸國稲田の房舎より。聖

見録馬代前會考卷之五



人又渴し奉る。專修專念の法旨と聽聞し。忽ち他力本願の慈海に悟入。淨土の真門と發得。是に依り貞應元年壬午。永く火宅の門と出。遠く菩提の室のあり。法名以念信と賜。御弟子の列は加多し。即ち毘沙幢村と一字と起立。照願寺と号し。専ら他力念仏の法流と遠近に弘通。終に寛元三年乙巳三月十六日寂。寺説云。念信房未だ俗。時の當寺の上。高澤山に居城。有り。聖人の御弟子と成り。毘沙幢村と一字と宮築。是より移りて住持。此を以て其子伊賀守高沢の城に相續。有り。是又老年。及び其子に居城と譲。自ら剃髮。照願房に隱居。斯の時。夏三代信光の時。高澤の城廓と毀。佛場あり。毘沙幢村より寺と引合立。今に至る。

退轉せんとす

○真岡の慶西房の俗姓の野州真岡の城主。大内國行の舍弟。大内四郎國弥の息男あり。美濃國不破郡。室原安福寺の中央あり。  
 ○赤沼の明慶房の。倍姓の常陸國の任人土屋五郎重行と。源氏譜代の勇士なり。僧老日穴の愛妻と失。執着の妄念却。發菩提心の善縁あり。終に出家遁世。越後國頸城郡四ツ辻と云ふ所。行ひ。有る。其折りに祖師聖人當國あり。御化導あり。其を聞。彼所に至り。聖人の御教化あり。速に信心了解。其の御弟子と成。法名を明慶と賜。夫より。聖人東関へ趣。時供奉し奉り。信濃國水内郡赤沼と云ふ所。爰に於て。聖人暫く御化益と施。諸人信仰。本願と信。



念佛者多有りたる。聖人其愛を去り常陸に趣んとして諸人御名残  
と惜み悲み奉ふ故に聖人明慶を命じ宜く汝愛ふ止り予が代に專修念佛を弘  
めし。又門葉の衆中にも多く。明慶の教化も同く。心も異ならずと  
なりし。示しり。明慶師命を背き難く。終に此所溜り一字と起立して真  
浄寺と号し。専ら真宗念仏と弘通せしめたりとぞ。

○祐玄空清親性行圓念信佛性閑善西園之傳

新江の祐玄房の倍姓の平氏小松内大臣重盛公の家臣。齊藤別當實盛の子。積  
科藤六と云ふ。後出家して法相宗と号し。南都東大寺に住せり。學功年と積  
後故郷小歸り。先祖追修のため。越前國新江と云ふ所。一字の精舎と造立して  
弘法せり。然るに祖師聖人越後へ御下向のとき。其高德と慕ひ参らせ。面謁

して聞法隨喜のゆゑ。淺く。終に御弟子と云はれ。法相唯識の修行と捨

る。偏に專修念佛の一行と云はれ。年餘八十歳と云はれ。病と云はれ。門徒小對し。仏  
恩の廣大なるを。稱名の声四方に聞えり。往生の素懐と遂に云はれぬ。

○成田の空清房の旧武藏國忍の城主成田平山の三男。成田下總守と云はる人なり。  
祖師聖人關東御徑廻の折。善縁と云はれ。熟して御教化と蒙り。御弟子と云はる  
信濃國成田の一字と建立し。真宗と弘通し。西巖寺と号し。

○和田の親性房の俗姓は藤原氏。依藤太秀郷の後胤。越前刺史波多野出雲  
守義重の嫡男なり。父義重の禪法と修行し。大佛院如是と号し。其子  
親性也。又禪法と修し。常坐禪工夫と業と云はれ。親性或時散心。鎮西。本末の  
弥陀と悟らん。心と疑して坐禪し。つらに。頗る。眠り。堪はず。夢も

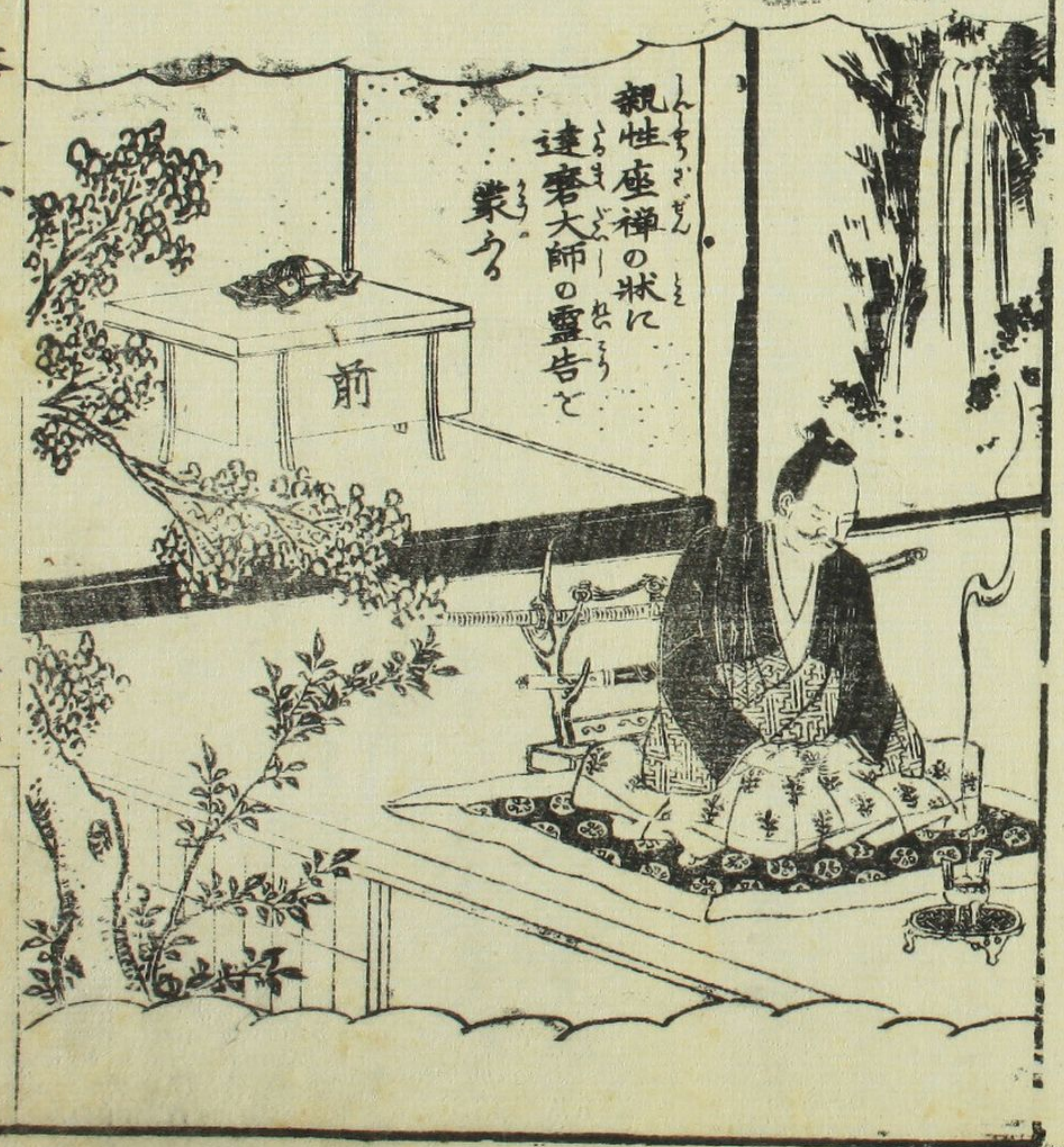


菩提達磨尊  
者ハ南天竺莫  
卧尔國王の子也  
後中国ニ渡リ  
佛法をひろヒ  
唐土の第一祖と  
天竺ニ歸ルを欲  
シク乃如来の正  
法成以テ慧可大



師ニ附屬せその  
偈に云  
吾本來茲土  
傳教救迷情  
一花開五葉  
結果自然成  
祝已ニ瑞座  
て逝る時大和  
十九年十月廿

親性座禪の狀に  
達磨大師の靈告を  
業方





わが現の如くして達磨大師忽念し現とて曰く汝心こころし坐禅とて坐る。仏心とて能く却て妄念起行とて速に無明の眼を覚さんと思ふ。親鸞聖人ふ随従して易行の大道ふへんと告ぐよと見く驚き覚り親性の奇異の思とて親鸞聖人の化導とて奉るに幸ひあり。我後の国は在ること聞て直ふ彼地ふりて聖人ふ渴く参るを弥陀超世の悲願凡夫直入此至極飽まで御教化は預り真の御弟子とて。越前國吉田郡和田ふ所ふ一字と建立し本覚寺と号とてを

○但馬の行圓房は俗姓は北條時政の玄孫北條弥治郎宗之と号と但馬國トクノ京都在番の間聖人の御教化と業り終ふ御弟子とて。法名と行山と号は未だ十六歳うけて若年うけるとも。且心無二の信者なる聖人滅後越前国小下向

して弘法の基跡を開く寺と但馬の真宗寺と号と行圓長命して九十余歳と保る。然るに本願寺第三代覚如上入當國は下り。在国の中面渴く奉とて。上人甚と喜悦りせり。行圓の法話祖師の直説と聞かど。予又如の一字とよんとて。行如と名づけさせりよと也

○素子の念信房は旧は三河国平田の庄の領主安藤薩摩守初正次 太郎と云とて武士と然るに聖人當國矢作の宿柳堂に御滞留の折り。高德と慕ひ奉り即ち屋形小屈請い。ふは本願名号の要法と受得し奉り。忽ち一念歸命の願心と發し。深く聖人の御利益と信し。竟ふ御弟子とて。法名と授り。念信と号し。然るに此所の道俗聖人の來臨と聞て。早く爰に群奉り。御教化と願ひ奉り。即數日御滞留し。日々御化益ありせられ。爰ふ



念信一字と三河國碧海郡素子村に造立し、永く御旧跡と傳へたる

○小林の佛性房は在五中將の裔孫として、其初天台の僧とす。祖師聖入三河

國素子村に於て御勸化せしむる時、佛性房彼方よりて聞法せり。聖人本

願一實の大道念佛往生の至極と御教示あり。久が佛性房頓小開悟發明し、

隨喜感嘆の余り、聖道難解の法と捨て、念仏易行の真門に入。即御弟子と

あり。聖人と尾張國小林の里に屈請し、昼夜御利益と蒙りたりとあり

○大浦の閑善房は白源氏の支族として、小笠原左衛門尉長頭とす。甲斐國の任人

とす。其姓智勇とす。文武の道は長練とす。然るに長頭とす。其に無常轉變

のありと觀し、世上栄利の交りて厭ひ、頗る浮沈と道と人と以てされども未

有縁の知識と求むるに由り、空く年月と送る。于時祖師聖人相摸國国府

津より、専ら化益とす。ひるに長頭とす。聞より、直ちに故郷と振とす。

急ぎ聖人の禪室を尋ね、宿す。日頃素願の眞實と聖人告を奉らせし。聖人

其志の深さと感し、他力眞宗の安心と最密に御教導あり。久が長頭頓一

念歸命の願心と發し、速に信心堅固の念佛者とす。即剃髮して法号と授

す。閑善房とて申す。是よりして聖人常隨給仕あり。既而御帰洛

の御時も供奉に従ひ参らせ。東海諸國と經り、竟ふ嘉禎元年尾張國羽栗

郡大浦、今尾張國に屬す。と云ふ所より來り、此所眞言宗の古院あり。程ふ聖人

即ちこれに入せ給ひ、當寺においで。暫く御勸化あり。ひるに遠近の道俗市の群

集し、隣里の男女山に、これに参詣し。もの、閑法隨喜せん。久事あり。既、久聖

入當所と御出立あり。久は彼化益と蒙り、面々我れと馳集り。御名残とあり



参りせり。何とぞ御弟子一人此ふとめりやうと。一同小敷を頼ひし。聖人も止  
とを得りし。閑善小斯と命し。留めり。閑善房も師命のまじく。當所ふ  
る。更弘法の基礎とひし。是と聖徳寺と号し。専ら専修念仏と弘通し。  
大お他力の傳燈と輝りし。竟お弘安四年辛巳三月四日寂とせり。

○渋谷の西圓房の舊渋谷七郎が末孫渋谷庄司とて。尾州中村の住人なりし。聖人  
三河國矢作よりめく。教導し。入折り。聞法の利益淺く。終は御弟子とせり。  
法名と授り。西圓と号し。義濃國葉栗郡よりわく。一字と建立し。これと西方  
寺と号と。

○一心信樂明空慶養了源慶圓蓮行之傳

岡田の一心房の蓮位房の提弟也。舊下総国岡田郡主稻葉伊豫守勝重とて

武士なりし。聖人建曆二年の春越後國より信濃より。尚下総来り。入折り。  
一とび聖人の教化を蒙り。信心決得し。御弟子とせり。一心房と号し。此一心房本  
願念佛弘通のめ。爰お一字と建立せんとて。願お聖人其志と歎ひ。遂お坊  
舎と當り。め。奇異や。一の牛あり。此寺の造立とせり。或は巨材と運び。或は大  
石。以脊おひ。人カと助け。既お其用度調ひ。聖人の牛。在祈りし。  
伺ひ。傍り。沼に飛入。乍ち一株の枯木とを化し。其形。ちさか。牛  
の。見へ。聖人奇異の思ひ。寺院成就の日。及び。願牛  
寺と号けり。斯く當寺と一心房お附屬し。常陸の稲田。移り。相  
○相馬の信樂房。俗姓。平氏。桓武天皇の後裔。相馬將門の末孫。相馬次郎  
師常の子。相馬太郎義清と云ひ。武夫あり。祖師聖人面授口訣の真弟子と。下総



のく小岡田郡一字と建管し弘徳寺と号し東鑑云元久二年十一月十五日相馬次郎師常卒六十令端座合掌不動搖決往生敢無其疑是念佛行者也七称结缘缁素七集拜之云々按之に信樂房の父師常より念佛行者七

○下妻の明空房の俗姓は桓武天皇の後裔三浦大助義明の孫平六兵衛尉義村の九男駿河八郎左衛門尉胤村といひ武夫あり建曆年中同胞將軍家に昵近しく其家大に繁栄せり然るに室治元年の夏に頃嫡男若狭守泰村謀反ふより一族終に滅亡せり此時胤村は奥州に在りしが兄泰村が反逆の事を知りて一世の憂は心憂く一門罪障消滅の爲に出家して所々を小山の判官長村の爲に擲捕せしが後免れ都の上り祖師聖人を遇し奉り日々に聞法の利益あり

うがす竟に門侶お列りて法名を明空と授り聖人お隨ひて常陸國に下向し弘法の基趾を関ヶ原に下妻おありて一字と建立し光明寺とを號しりて永治二年丁酉二月十三日法薨七十三一終に當寺に於て寂し

○笠間の慶養房の俗姓常陸國の住人源家の支族稲田九郎頼重と音に聞へし武畧の達人なり然るに宿因其時を得て聖人お遇し奉り本願圓頓一乘の要法を聞しり五濁を埋めては璞玉とす六根通を得て連城の壁の光を發し直に剃髮深衣の姿となり聖人魚二の御弟子とありしが俗稱を其より頼重房慶養とて法号を賜ひり聖人御帰洛の後常陸國笠間より専ら弘法教化をありり一は教養房

○平塚の了源房の俗姓は藤原氏より鎌子内大臣より十六代の後胤伊豆大領

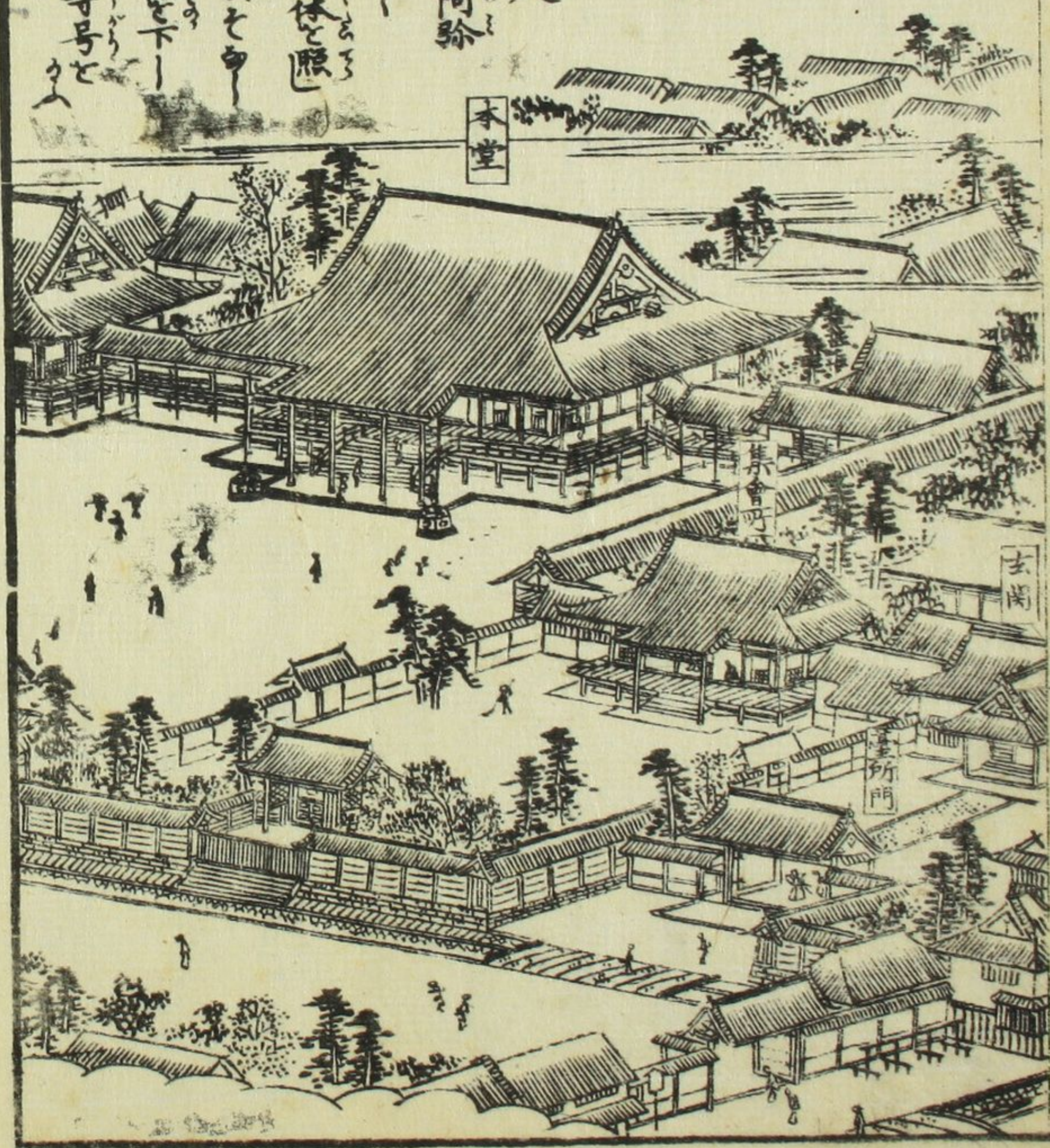






佛光寺御門跡  
御堂

天智十九年(680)後醍醐天皇の御宇に當り、當山第七世了源大の時當山御本尊阿彌陀如来金光を放つ。禁宮の内を色毛体と照る。又主上奇異の思ひを申給ひ、感の有り、詔を下し、改め勅く、仙光寺と寺号とす。



專修念仏の棟梁なるべき、綸旨を賜り、則ち尊像の聖人六角堂御参籠の時感得、

の所の尊像なり、尚、別は宸翰と深らね、祖師聖人の御傳抄を書写し、仙光寺へ寄附し、のれを靈室什物あり、あり、畧之。





尋ね詣り。聖人と頂禮し奉て。日頃の素志と委くの涙と共に慈教と示し  
 かわりませとを願ひける。聖人いと不便の事と思ひ。弥陀超世の本願他力念  
 佛の旨趣を説せり。細やかに教化せらるる。源隨喜の涙も咽び。渴  
 件心せり。師弟の礼最う。是より常隨給仕り。其の事實とぞ  
 盡り。余後文曆元年聖人御帰洛の折。了源離別の悲。最切なり。一  
 心聖人。其真心を憐れ思召し。自ら影象を彫刻せり。是と月より竟み  
 京都。趣とて。爰ふ。源花水の邑。宿河原の園。我母虎御前の遺跡  
 則此地二字を造立し。善福寺と号し。専ら真宗と弘通し。普く群  
 生と利益を事多し。建長三年亥年三月十二日午の正中當寺に於  
 して。往生の素懐とを遂らる。于時行年五十九歳。依り翌年祖師聖人

自書し給ひ了源の往生を称嘆せり。關東の諸弟は示し。鳴呼了源  
 武門の家は生れ。再び父祖の家と與。若名と四海に施し。終は菩提に入。の  
 他力易行の本願を歸し。聖人の賞誓と蒙り奉ふこと。實は二世悉地の達  
 人とす。

○野寺の慶圓房は。舊小判官行重の息男なり。三河国矢作の流小。鳥丸  
 龍宮といふ所は。居城して。武備最盛なり。宿因の発する所。や。ソ。ソ。ソ。世  
 の累塵を厭ひ。富貴の交を絶し。終は剃髮。浣衣の身となす。屋形を則精舎  
 とす。専ら天台圓宗を修し。祖師聖人。抑堂御勸化の。了海法  
 師と縁あり。忽ち台教を捨棄して。永く聖人の御弟子とあり。真宗無  
 二の碩徳とぞ稱する。







○荒木の源海房の俗姓は藤原氏大織冠の末裔日野家の庶流として武州荒木高田傳の住人安藤駿河守隆光とて文武小譽りて武士たりしが隆光二人の男子あり兄は月壽と名づけ弟は花壽と呼び寵愛せりたりしに有為無常の如くさぬ老少不定の娑婆の習ひして兄の月壽は七歳弟花壽は五才にして病にちかひ日露の命の消えりて隆光天を叫び地を咽び泣き涙盡き喚ぶは声なき俱に死せむとて歎き居たりしが或夜の夢に端嚴正相の僧来現して告ぐ曰く汝二人の子は觀音勢至の二大士あり假令愛子と生じても無常變易の理を示しは偏に汝等夫婦として菩提の道入るべし汝が為あり今幸い小末代不思議の善知識あり親鸞聖人と名づく汝彼知識は渴し出離の要路と問べしと告ぐは則夢の覺るる隆光大に歡び急ぎ

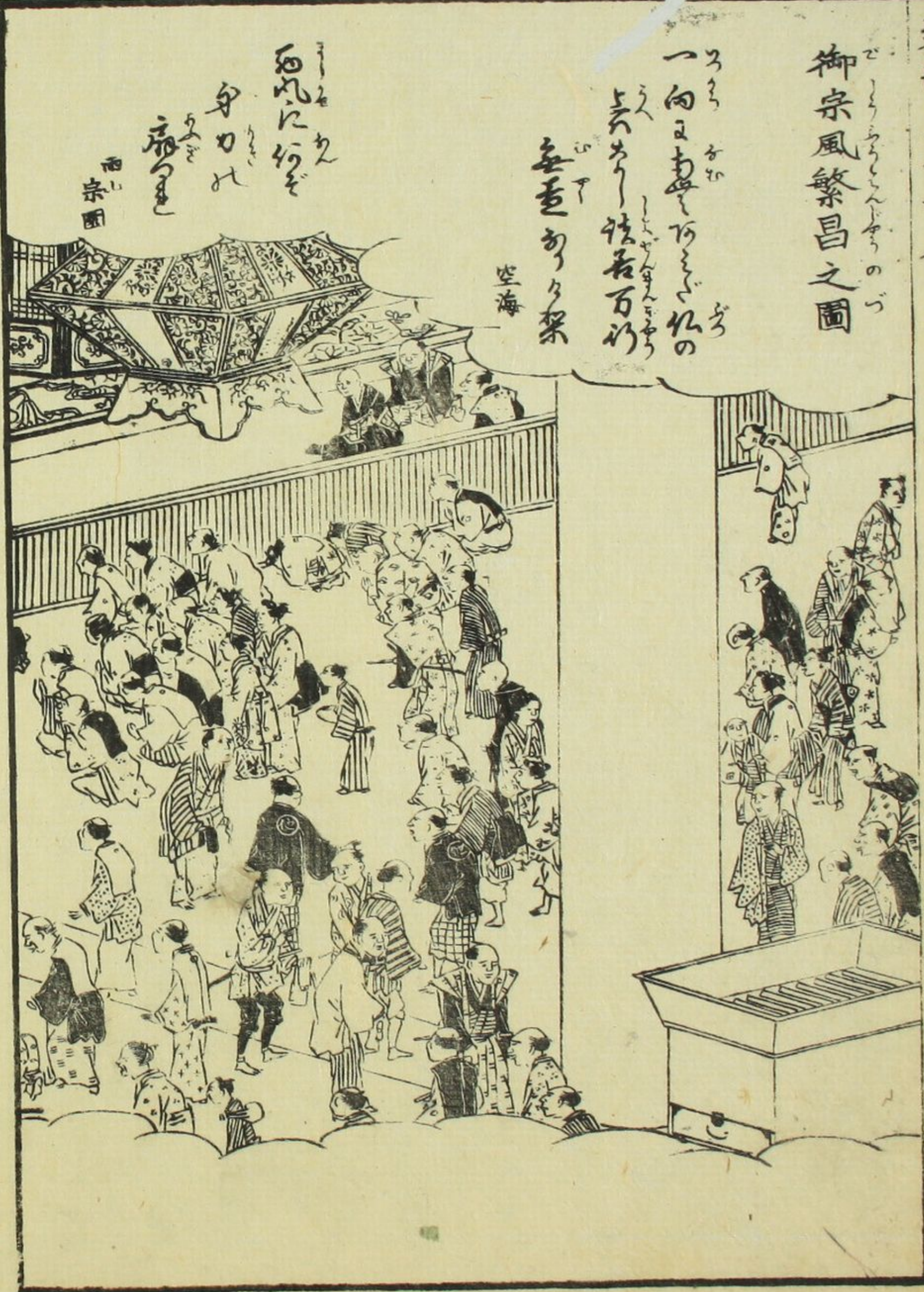
聖人の禅室を尋ひ奉り聞法隨喜しく竟に聖人の御弟子とて法名と源海と授けり。于時康安元年隆光三十四歳也と云々 二十四輩記

按ずるに康安元年の聖人滅後九十九年の後より正しく年号の書損なり是れ高田正統傳云建曆二年九月聖人城州山科北邑に寺を草創し是れ江州荒木の村に源海とて僧あり初は天台宗山門無動寺の学侶ありしが但師聖人聖光院入室の時より門下を参りて専ら是人の達請より當寺建立たりしと云々然るに早く天台宗学侶と有し見ゆ傳は相違り考ふに因ふ云右山科郷に御建立ありしが興正寺とて勅諭を蒙りて真佛房とて以て住持職としり貞永元年真佛上人をして下野國高田專修寺の寺務職としり依り興正寺と源海房は附屬しり介後百有余年と

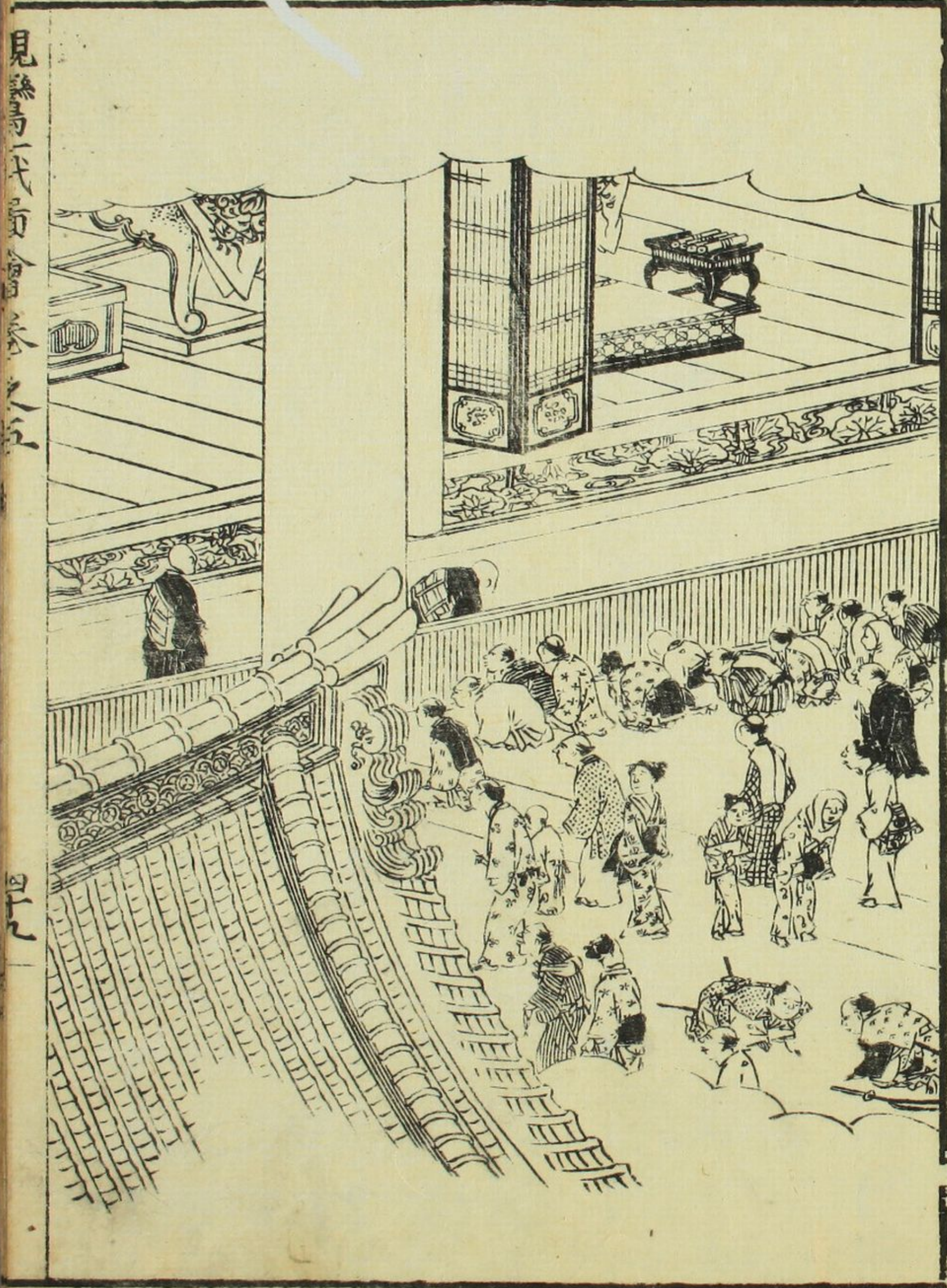


御宗風繁昌之圖

一向日あまのあまの  
とみきり 往者万行  
空海



白丸に何ぞ  
身かれ  
宗風





經嘉曆頃足利尊氏公祈願寺成渋谷小移寺一時小田頃  
 惡徒あり當寺の本尊弥陀佛の靈像を盗と去るに道少と甚重と一足  
 行事を得ず故野に棄す立たるぬ然るに此本尊光と故禁中と輝と  
 玉體を照すり玉上後醍醐天皇奇異の思ひをまりし其光明の所在  
 て尋ぞしめり則ち野原の叢中より佛像を得ず是と獻す寺僧  
 此と傳へ聞ゆる所の臺座を以て證據と奏聞して之を乞ふ帝  
 叡感斜あし乃ち佛像と本寺に還し賜す詔を下し改め勅して佛  
 光寺と寺號を賜ふ此尊像は往昔聖人六角堂と御奉籠の砌感得り  
 靈佛なり文明元年當寺住職經豪上人又蓮教上人と云佛光寺を割り別し一  
 宇と建て興正寺と号し今西六條又又天正十四年豊臣秀吉公大佛

殿造営の時木石運送の所用は就て今地五條坊門又移る故に佛光通高倉

寺興正寺の舊一寺なり後に兩院と今俱に御門跡なり

御門侶の衆僧或は改宗し僧或は凡俗發心の出家許多其數多技不  
 べし只其一二を採りて小著す之を實に弘長に始り今安政に至つて  
 既に六百年の末世に及び御宗風古へ倍々彌栄へ至ると  
 御繁昌りせらること偏に聖人の廣大無量の御尊徳あり

○朝鮮國專修念佛宗風之條

朝鮮國金山海ふ寺なり專修寺と号し法の弥陀專修三昧なり僧徒の妻  
 帯あり稀に無妻の者も塔頭八十餘宇未寺二百餘貞日本親鸞師の  
 法流顯智和尚の弘し所なり即ち第一祖と云ふ朝鮮國專修寺記



高田正統傳私云予天和二年八月南都東地井氏が宅に於て往昔  
 朝鮮征伐の斛帥小西撰津守の軍將平岡佐左衛門重方が予權之々重弘  
 參會せり。和漢の談話及後予向日我聞朝鮮國親鸞の法流  
 り。公り聞事を裁。翌日一卷の書と携へ來り云是我先考彼  
 地の事と誌の書と。予これと披く。金山海專修寺の記と寫せる  
 篇あり。是は於て我舊聞の錯らざるを歡び。今此の記を世に傳ふ。此の  
 大つと云々

親鸞聖人御一代記圖繪卷之五大尾

皇都書林西村空華堂藏版目錄

東六條下珠數屋町東阿院西入

丁子屋九郎右衛門

教行信證	四	愚禿鈔義要	八	親鸞聖人御傳鈔	上下二冊入
同御自釋	一	同纂釋	四	同閉本	一
同六要鈔會本	十	同樹心錄	四	同小本	并寫本指一
同義例	一	同模象記	六	同繪入	平假名
淨土文類聚鈔令刻 愚禿鈔	一	眞宗聖教字箋	三	同照蒙記	智空
入出二門偈三品入云	一	入出二門偈試解	一	同視聽記	惠空
同三品入 <small>小本 薄葉</small>	一	同大意	一	同讀法	小本
文類聚抄私記	七	同窺祖錄	三	本願寺御系圖	一
同蹄涔記	四	同流情記	三	親鸞聖人略傳	并常葉 影像記
同首書	一	同參考	二	同畧傳十六門記	一



七祖聖教 <small>新版</small>	十一	十住毘婆沙論	五	同宗祖記	一
異譯三部經 <small>五存經</small>	四	易行品分科	一	往生要集	六
披異三部經 <small>大本 訓</small>	三	同冠注	二	同和解	十
淨土三部妙典 <small>小本 延書附</small>	一	同要津錄	三	同釋迂要	一
三部經私記 <small>教氏云</small>	三	同讀易行品	三	同首書	六
三部圖經頭書	三	淨土論大意	一	同指麾鈔	廿五
三部經鼓吹		往生論註	二	選擇集 <small>惠聖点</small>	二
三部經略圖 <small>唐氏 改据</small>		同顯深義記	五	略論淨土義 <small>新版</small>	一
淨土三部經和訓 <small>折經 西点</small>	四	安樂集	二	同首書	一
同三部經 <small>折經 西点</small>	一	同首書	二	七高僧教化鈔	七
同中形 <small>折經 西点</small>	一	去義分商量鈔	五	西方要决 <small>同卷註</small>	一
同三部經 <small>折經 西点</small>	一	教讀淨土經寫統	四	善惡因果經 <small>同首書</small>	一

諸本 <small>披合</small> 御草稿三帖和讚	三	大乘法苑義林章	七	因明論大疏	四
同小本薄葉摺 <small>新版</small>	一	同科圖	二	同瑞源記	八
同首書	三	勝宗十句義論	一	同前後記	五
同註解	廿	同科註	一	同四種相違私記	四
同鼓吹 <small>一名 本義云</small>	七	同釋	一	同註釋	三
<small>此書ハ尺假名ニテ三帖和讚全 部ヲ講説シテ余ノ注書トハ違 ヒ至テワカリ安ク宗侶ノ初心 ハナハタヨリトナルヘキ書ナリ</small>		同決釋	五	畧述法相義	三
淨土和讚掌解	七	首七十五法名目	二	同補闕	一
正像末連環解	十	有宗七十五法記	三	同依釋	四
御文示珠指	九	三國佛法傳通錄起	一	天台佛心印記	一
同明燈鈔	十五	法宗源	一	同註	二
淨土源流章	二	淨土源流章	二	同註解	二
正信偈抄揚鈔	三	二十唯識論述記	三	同雙要講錄	二



龍舒淨土文 <small>五目錄</small>	正信得勸則 <small>前後六</small>	法華諸品大意
<small>コノ書ハ往生八傳三十卷ヲノス 祖師御本書ニ御引用ノ書ニ</small>	奉讀十二光弁	科十不二門
眞宗名目圖	淨土和讃并述編	華嚴金師子章
同 小本 并薄葉摺	同 即席法談 <small>四十八首</small>	<small>遵心安樂道 合</small>
八宗綱要	同 大經讚 <small>廿二首</small>	因果物語 <small>百廿三</small>
同 校訂 新版	同 觀小讚 <small>十四首</small>	<small>此書ハ今世ニ現當アル處ノ 因果ノ入録マツルニ凡書ナリ</small>
樂邦文類	高僧和讃開導 <small>前後六</small>	袖珍勸考 <small>小本</small>
存覺上人二期記	同 寫瓶錄 <small>中本</small>	袖珍勸錄 <small>小本</small>
雜修十三失合釋 <small>百廿二</small>	正像末可說	眞宗一應法談 <small>小本</small>
愚迷發心集 <small>百廿一</small>	速懷和讃勸化鈔	月のおとろ <small>小本</small>
<small>此書ハ解脫上人ノ述ニテ無常形 勢ニシテ凡長三ノ大書ニ</small>	現世利益和讃勸導 <small>中本</small>	兜唱導選 <small>中本</small>
妻 鏡 <small>無住和尚述</small>	同 後續 <small>並書集</small>	<small>此書ハ眞宗ノ初心ノ見悟 法談ノ被トナルヘキ書ナリ</small>

興御書鈔	御文睡眠錄	勸化因縁并談集
同 諺解 <small>平ラネ</small>	同 高頭錄	<small>勸化 西方</small> 深信釋法談
同 述讚	同 後講錄	二河白道護信錄 <small>前後六</small>
同 勸化燕滿錄	同 末代无智醫訓	十四行偈開華苑
式歎德文分科 <small>小本</small>	同 白骨拾遺抄	<small>和哥 同錄</small> 勸化世夏談
式文勸化述讚	大經悲化章演義	一枚起諸談藪
式文勸化淘汰鈔	同 善惡業道談	三文一錄八十余座
<small>コノ書ハ式文ノ全意ヲ解并 シテ一部ノ要ロワカス</small>	同 三誓偈宣唱錄 <small>新版 中本</small>	帳中五十座法談
歎德文鈔	同 後續 <small>並書集</small>	卷懷五十座法談
同 文意	同 四十八願喚鈔	改悔文便導
同 勸化鈔	阿弥陀經依正談	
<small>コノ書嘆德文全部ノ真意 大意詳カニ并説セリ</small>	開華法話	



无章无假名簿用指

御和讚 寸珍本  
大形本

右各正信偈念佛儀文集入  
但報恩讚和讚其外儀文  
増減技摺御所持ノ御巻  
年次第注注文可被下假事

懷玉御和讚 寸珍本

校正御和讚 寸珍本

コノ御和讚ハ追來ノ御堂衆  
休成師ニシテ授心シテ世流  
布ス莫ニ懐山 便利ハ申ニ及父  
カナラズ小ニイタ近久シキ故  
初心ノ誓古ニ是調法ナリ  
右二本トモ薄用指出来

懷審御和讚 寸珍本

夏ノ神消息 尺ノ御本  
御俗姓改悔文

諸神本懷集 元祖

眞宗九表記 尺ノカチ

コノ書ハ眞宗ノ故実ヲツクメ  
タ凡書ニテ坐右ニオクヘキナリ

眞宗傳燈錄 尺ノカチ

此書ハ太子七高僧宗祖傳  
義ヲ宗義法式ヲ論ス

大谷遺法纂要 一

眞宗遺文纂要 一

釋教玉林和尚集 中本

コノ書ハ元祖祖師遺師ニ對シテ諸  
名僧諸家ノ教ノ長アリ

宗要文 惠空

感嘆抄 一

小僧指南集 尺ノカチ

右眞宗ノ修行法體習事等  
心得ヲ記傳化初學ノ爲メ

大經會疏 十

同元曉宗要 一

同嘉祥疏 一

觀經天台疏 一

阿弥陀經科 一

同通贊元 三

同義集 一

同隱顯記 一

同元照元 一

同臺淨史 二

往生大要鈔 子ノカチ

專修念佛問答 二

親鸞聖人御法話 尺ノカチ

同 血脉文集 一

眞宗授要編 全一

同 續編 一

右ノ書ハ祖師聖人御在世ノ  
御所弟子方ニ再傳ノ教化ヲ  
其終ウツシオカレシ大切ノ書ニテ  
信心ノ骨目末世凡夫安心ノ龜鑑

實情記拾遺 通如上人  
所法語

實如上人実教 尺ノカチ  
赤尾道宗廿三条 合本

眞宗教要鈔 尺ノカチ

女人教化集 全二

一念發起鈔 全一

右ノ書ハ今ノ世ノ善知識方ノ御  
教化ニテ今ノ世ノ人ノ信心各入

譬喻鈔 尺ノカチ

コノ書ハ他力ノ安心ヲ喻ラセテ  
衆多アラハス此師一世ノ情折

他力領解鈔 惠空

作業持勸鈔 同

專修專念鈔 同

安心消息 同

右ノ書ハ惠空講師ノ著述ニシ  
テ安心ノ極意ヲアラハシ居之

叢林集 尺ノカチ

此書ハ三經師文ヲハシテ其外  
法門ノ要義眞宗ノ教實  
行義等ヲ又曾テ眞宗  
ノ僧侶平世坐右必用ノ書

安心決定鈔 尺ノカチ

同評釋 二

帖外聖教 尺ノカチ

眞宗大經御消息 一向屬西抄  
眞宗教化抄 十兩色之尺

難易分別抄 一

聖道淨土名目 一

并述名目抄 一

唯信抄 一

本願相續集 一

一念發起抄 一

眞宗要義 一

右ノ書ハ御教名聖教ニシテ  
凡ノ佛聖教ヲツクメ凡書ナリ

牛療治調法記 一

牛料攝要 一

馬療治調法記 一

馬療攝要 一

自用馬療医便 三











